

911.3
ル
1

作
地
十
第
卷
白
集
物
通

一

洞海名藻



作此十第卷の巻末に書

一具菴校合蔵

拾葉の巻を

世乃海のよから抄を

いふこと一巻教の係り

人をよふこととせしむ

りていふこととせしむの係

小の巻の係り

序

な...
あそ又も...
か...
る...
ま...
...
...
...

美代...
...
...
...
...
...
...
...
...

序

山崎闇斎 先生の御遺訓
 先生の遺訓は、
 天地の理を明かにせよといふこと
 人心の善悪を正すこと
 事功の成否を問はずといふこと
 死生の理を明かにせよといふこと
 徳を尊ぶこと
 仁を尊ぶこと
 義を尊ぶこと
 礼を尊ぶこと
 智を尊ぶこと
 信を尊ぶこと
 誠を尊ぶこと

先生の遺訓は、
 天地の理を明かにせよといふこと
 人心の善悪を正すこと
 事功の成否を問はずといふこと
 死生の理を明かにせよといふこと
 徳を尊ぶこと
 仁を尊ぶこと
 義を尊ぶこと
 礼を尊ぶこと
 智を尊ぶこと
 信を尊ぶこと
 誠を尊ぶこと

の為士權をめぐりては
 天保四年 癸卯六月

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

人名録

武藏

鶯笠一蕙 茶靜大梅 節之松 秀田 兼月 岨
 素恣千輅 了是古陸 史千久 戒斗 延詠 婦
 碓嶺 應々 碩布 永木 小圃 南濤 在 於 一樓
 抱儀 椿海 謝堂 松巢 寒木 女和 琴一 推相 我
 八朶 對山 得蕪 有月 了知 麻交 禾葉 龜得
 梅宇 惟草 遲流 伯夫 荷乙 文洲 牛山 休圃
 鳥義 氷谷 八重 女英 山粗 年露 泉大 官千 齋
 太拳 幸雄 ちろき 鶯郷 女伸 安雨 村 埃 幾 乙 女
 清樂 渥美 存一 ちろき 其築 其兆 夜雨 丸白 起

廿貧里竹何年榭塔太珉萬居曾見卓郎
斗采雨槿羊丈素帝素橫松匠得年湖山
扇紀暮俗礪山白桂荷了春路溪齊文教
五調東外松什周慈五老桃鳩松井千之
孚石狻國霞城岐久守笑詔效子宗川扇花
栢樹以交庚年以吉貞雄真汝美秋臺樂水
雁臺太執昨木里房女耕雪女亥乃女南々政查安
文來桂秀青龜青鸞里春玉民冰瓶吐香
下總

桂凡洞雨梅雪雨花女桂茅女青峨蜀錦文廣
一甫錦哉露什雨汀茶瓶青池荷堂幻芝

名村一笠狐采兔鄉江月斗圍四明市石

上總

去阿寬里

伊豆

杏園

甲斐

芳谷采牙松海

相模

雉啄洞々

少甲陸

野巢玄々甫石甫月思文雨夕眉蕉藤和

山笑素白睨眉素
有惟柳柳美呼友玉葉
蘭月湖平嘉月杉
月東上杉外
戴星
清平竹秋甫山石
龍五竹尚古只
衣蝨浦
谷從上可杜年一
兆一兩五風尺山
民枝
范父次峰天葉與
秋菊民雨明三槐
方居
真翠南枝立角

上野

壺半茅丸阿兮雞
周茶徑葛粉鹿太
器水
可布鳳石望雄栗
笑掾々田齋之厚
粉月

下野

星谷道雄素有石
符積翠一水花甲
知幾

葛蘿嵐齊素考一葛

信濃

八朗易足半山

越後

芝蘭陽湖万里文
里月下應雨五岨
孔正
赤蓼吏川宗兆三
桃李朗宇桂可得
蕉告
其席文鬼巨童松
舍上之種春及兀兮
玉和久
文鵬湖月文光乙
老左陸笑壺羽白
二洞
左耒波丈西阜蕉
丘愚本誼老宇弘
十翁
可英了々松塢真
萱吳漢文齊蓮尊
抱琴
雲也棠郊里月如
水迦孫乙雅秀苑
柯亭

出羽

古翠太 橘宇高 二丘 稻刈友之 玄子左琴
 雀堂木 公斗玉凉 菘民坊丈 二正令吟霞
 松怒秀 橋月甫如 旭梅周似光之 圭松和
 一幸深月美文川 丈三丁川長旭 丘羽人
 如仙秋和 咫雲乙 員脚風貝谷石 砧う孫安
 二了雲山 李關山水 不材志省 吟步稻香
 柏惟水竹 志蘭其水 玄文螢雨 乙蝶蕉素
 文呂子績 幸二羨峰 來六擔月霞江

陸奥

曰 人默巢 多女馬年清女一之 城洋札月

草井薪水 一露夕山 汀左木司 一竹芭角
 五臺石上 竹葉芦帆 芦月文 儼無才 素三
 祖卯布席 竹岫双之 蒼夫揚花 鷺閑 甫山
 大費二晶 江三霞翠 蓼雨不曲 長彦 永圖
 雨芳巢乎 陶烟松 栗有水雨明 量山 如蓬
 不流龍化 篠流高山 篠山 薜母瓶乙 東職
 可侍之 謙平乙 調天年 采月 忍山 文月 三平
 半侶萍沙 文膏桂裡 與人九畦 綾流 季州
 双二鳳毛 草琚蘭路 雨考竹里 竹馬 五篋
 酒好 女不着一甫 月露雨窓 一 素未
 蘭中大椿 東樗一毛 一陽文和 乙疾 馬尻人

素封點牛隊之无木架山雄夷則一翠梅溪

...

...

...

...

...

...

...

...

...

人名錄終

類題十萬句集初編春之部目錄

春之上
元朝
立春
初春
初春

元朝
初雞
初鳥
初日

今朝春
明春
花春
君春

玉春
年春
菴春
年立

初曆
初慶
寶船
禮者
御降

蓬萊
喰積
門松
門鏡
御降
松內
若水
若夷
い終つむ

雪解	牙返	小松曳	小正月	羽子	とんと	藏閑	寶引	懸想文	太箸	屠蕪
春雪	春寒	養父入	子日	粥杖	萬歳	今年	福曳	弓始	雜煮	穗俵
初霞	殘雪	傀儡師	七種	正月	榎曳	左義長	水祝	着玉始	六福	み肴
霞	淡雪	餘寒	人日	睦月	手鞠	節焚	破弓	詣始	年忌	鏡開

現鶯	椿	白梅	福壽巾	土筆	佛坐	八巾	系遊	遲日	長閑
剝鶯	落椿	柳芽	木芽	落莖	娘菜	若菜	東風	暮遲	永月
海苔	雲雀	貓意	梅柳	落芽	鶯菜	薺	春風	水母	暖
脚鳥	駒鳥	百十鳥	松花	野梅	下萌	芥	春雨	陽冷	麗

春之中

二月 辛九

夜更着 六三

二日灸 六十

初

春月 辛一

臈月 六三

臈夜 六四

春夜

春宵 六五

初雷

出代

彼岸

涇繫會 六六

西行忌 六七

水口祭

田打

焗打

初虹

春日

春水 六八

春海

春川

春山

春空 六九

春雲

初花

初櫻

系櫻

接木

接穗 七十

挿木

苗代

種印

菜花

大根花 七十一

虎杖

早蕨

蕨

獨活

蒲英公

麻蒔 七十二

種芋

杉菜

菊苗

菊分

芦角

芦芽

葛芽

蓼萌

艸蒨

藝縷 七十三

春草

畑燒

山燒

燒野 七十四

春野

燕

雉子 七十五

婦雁 七十六

行雁

雁別

春雁

親雀

孕雀 七十九

雀子

曳雀

鴨引

鳥巢

巢鳥

鳥交

初蛙 八十

蛙

蜂

蜂巢

蛇

蝶

螺

落角 八十一

鮒鱒

春之下

三月全
汎二十
櫻九十
花九十
雲九十
海棠
董
躑躅
呼子鳥
小點
春情

珍生全八
春霜全八
山櫻九十三
花雨九十九
梨花百
連翹百二
藤百三
鳥雲入
蜚春
行春

雞全七
別霜
暎櫻
花見
杏花
辛夷百四
山吹
麥鷓
竹百七
春暮

雞全七
合全七
桃全九
花九十四
木蓮花
木瓜
茶摘百九
柳麥百六
若點百六
三月全
春題百八
不知

類題十萬句集初編春之部上

洞海舍涼谷編
一具菴一具校合

元日

元日江戶 素心
元日陸奥 大梅
元日確嶺
元日常陸 一蕙
元日多由女
元日涼谷
元日一具

〇三
〇四

陸奥十

六日

元日 子物 妻 舟 行 在 喰 う 於 箱館
 元日 や 輕 く 是 々 々 出羽
 元日 や 人 を 通 じ 好 音 町 民
 元日 や 物 々 々 舟 臺 猫 の 飯 陸奥
 元日 や 人 々 々 々 々 々 々 々 々 々 左
 元日 此 物 葉 を 起 々 の 子 鬼 越後
 元日 や 子 子 起 々 々 々 々 々 々 芭
 元日 や 又 一 口 増 々 々 々 々 々 陸
 元日 此 者 々 々 子 吹 々 々 々 々 々 松
 元日 や 々 々 々 々 々 々 六 雪 の 降 江
 元日 や 々 々 々 々 々 々 山 の 靴 千
 元日 山 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 一
 元日 山 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 千
 元日 山 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 輪
 元日 山 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 山

元朝
 立春
 立春

元日 や 門 々 々 々 々 々 白 の 依 卓
 元日 や 々 々 々 々 々 々 人 通 々 素
 元日 や 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 左
 元日 や 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 有
 元日 此 の 松 の 新 々 々 々 基 盤 式 素
 元朝 や 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 来
 元日 や 物 々 々 々 々 々 々 々 々 々 玄
 元日 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 吟
 元日 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 山
 元日 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 正
 元日 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 具
 元日 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 一
 元日 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 具

初春

暮去や小舟の棹も花もあはれ
さるさやあやとあはれとあはれの宿

箱波

碓嶺

春の夜やあはれとあはれの宿

江戸

大梅

春の夜やあはれとあはれの宿

江戸

松井

初春や智恵の目もあはれ子情感

出羽

白峴

春の夜やあはれとあはれの宿

陸奥

箱波

初春やあはれとあはれの宿

越後

双二

初春やあはれとあはれの宿

越後

五峴

初春やあはれとあはれの宿

越後

素志

初春やあはれとあはれの宿

越後

松嶋

初空

初雛

初雛やあはれとあはれの宿

初鳥

初鳥やあはれとあはれの宿

初日

初日やあはれとあはれの宿

初日やあはれとあはれの宿

初日やあはれとあはれの宿

今朝春

今朝春やあはれとあはれの宿

今朝春やあはれとあはれの宿

今朝春やあはれとあはれの宿

陸奥

江戸

出羽

江戸

陸奥

江戸

陸奥

出羽

武蔵

陸奥

陸奥

陸奥

二晶

逢流

旭丘

丁知

民校

周藝

玄々

一具

川長

樂水

大費

明春

花春

君春 玉春 年春 宿春

中々初春の暁を待てや明の暁
 ありては雲も形はあやの春
 新愁も新癖も癖はあやの春
 春白を待つ初嫩はや茶の暁
 新雨の氷もと春を花の暁
 春の暁を待つ初嫩はや茶の暁
 春の暁を待つ初嫩はや茶の暁
 春の暁を待つ初嫩はや茶の暁
 春の暁を待つ初嫩はや茶の暁
 春の暁を待つ初嫩はや茶の暁

出羽 宇 齋
 江戸 冬 臧
 上毛 茶 径
 陸奥 自 岨
 一 蕙
 友 枳
 雨 考
 木 司
 葛 松
 羊 山
 越後 鼎 湖

菴春

年立 時慶

春の暁を待つ初嫩はや茶の暁
 春の暁を待つ初嫩はや茶の暁

江戸 春 色
 出羽 柳 風
 江戸 千 之
 甲斐 椿 海
 芳 谷
 五 岨
 木 木
 野 巢
 卓 郎

年王
年始

禮者

口上や上戸のふま採り
 とありてと出るの禮は空に
 手は空て字は空とてふま採り
 年王や味ゆり忘るる貝抄子
 家内を立帰るやうに手始り
 手始りて了れしやうに男うけ
 女書子有るやうに手始り
 借の肩借りて是依ぬ禮を
 了ともよ一初儀の禮をうけ
 ありて名の人をもよとて礼を
 答の明やを初禮をうけ

江戸 葉 是 採
 下徳 松 鳩
 江戸 妙 子
 陸奥 一 湖
 江戸 南 瀆
 下徳 桐 雨
 大 抄 抄

初曆

初夢

宝船
御降

抄一其何おと一子を佐曆
 やの誤あるやの抄と初曆
 ちの曆表る身ある先床一
 母のよに持てて目出さし初曆
 會伴根のちや抄を初しよ
 芳智のの出をるやちの曆
 ちの妻や舟持家のあ初し
 初夢子や咳をるに神路山
 戸を解ておを佐妻初しよ
 寤入はくをのちをるに舟
 此降や大のちをるに舟

箱館 蕨 雨
 越後 蕨 雨
 常陸 高 女
 陸奥 山 笑
 越後 一 陽
 江戸 宇 桂
 江戸 五 峴
 梅 宇
 香 象
 茶 靜

蓬萊

喰積
門松

御陣や 高き 陸も 松の 史
 久傳や 猫志 舟の ぬ道 荷
 蓬萊や 松の おくも 薩の 武藏 全
 蓬萊代 二階 備る 市 碩布
 蓬萊を 窮 庭 越後 南
 蓬萊と 少も 杉 尾 花 万 里
 蓬萊を ぬく 男 耳 花 甲
 喰積を 持て 来 跡 上 毛 吟 震
 喰積を 子 兼て 忘 江 戸 雑 周
 門松 子 形 心 松 跡 具

門餅

松餅

松内

松や 根も 高き 物 史
 門松 子 形 心 松 跡 栄川
 門松 子 形 心 松 跡 左琴
 門松 子 形 心 松 跡 日光 左
 門松 子 形 心 松 跡 日光 知機
 門松 子 形 心 松 跡 日光 涼谷
 門松 子 形 心 松 跡 日光 積翠
 門松 子 形 心 松 跡 日光 松秀
 門松 子 形 心 松 跡 日光 松園
 門松 子 形 心 松 跡 日光 谷徒

障子の何れか 松のち

茶の心より遊む 易きよ 松の内 京在江戸

持たす 酒後 市人 歩の月 越後

東の松の扇 法 月 京在江戸

松のち 油 け 志人 月

子 竹 寺の 物 異 世 松の 月

若水 山 月 星 一 月

若水 山 月 星 一 月 江戸

四 正 朝の 若水 月 星 一 月 江戸

若水 山 月 星 一 月 江戸

若水 山 月 星 一 月 江戸

多事女

山

節之

宗飛

字桂

文里

月峴

曾見

五峴

岳川

丁知

孝子 謹 摩の 借 物 若水 越後

以 秘 法 也 や 若水 月 星 一 月 上毛

定 初 之 月 星 一 月 江戸

徳 儀の 前 若水 月 星 一 月 江戸

若水 山 月 星 一 月 日光

ちろ

栗笑

兔楳

椿海

石荷

史干

葛蘿

素芯

荷乙

四葉

四葉

四葉

以 秘 法 也
層 換
徳 儀
鏡 菊
太 著
雜 費

若 水
若 水
若 水

大福 年男

着想文

着衣始 淫初 宝引

子を抱て雑考の撰ふ向の意
 大釜の湯のさる春はくくく
 大婦くを春かたや猿取
 とく男初くくくくくく
 年男豆くくくくくく
 横空や止那くくくく
 龜志文子の妻くる根く
 弓始舞の意をくくく
 常の事ぬ分くくくく
 わんをくくくくくく
 宝引のくくくくく

一 雑
 石 符
 干 輪
 小 圃
 鼎 脚
 范 父
 南 中 女
 木 司
 蕉 丘
 高 土
 杜 年

福曳

水祝

破魔弓

載開

今年

左義長

宝曳や大馬柳のけり
 宝引や以くくくく
 福曳や思ひ持くくく
 福引や持くくくく
 福曳やちくくくく
 水祝は情のときくく
 破魔弓の謝禮くく
 只わくくくく
 今年くくくく
 左義長や少半律止くく
 さる象考あくく

民 枝
 木 木
 高 占 女
 有 象
 氏 枝
 古 翠
 一 甫
 去 々
 石 符

借焚

とんと

萬歳

左家考や雨く借ても目出さる
 吉例又庄屋の畑や借〜
 畑取の夕初く借や飾ま〜
 一〜焚火も飾〜先一人
 旅人のきやる若者ん〜れ
 著出もとんと風工部ま〜
 茶もやふ二託紙物も飾の虫
 茶もやと列序又まぬ結仕人
 万才と飾〜まてかく廟〜
 右貸り茶も草ん山の城

越後 宇 何 友 之 多 由 女 知 機 湖 山 太 拳 学 兄 高 由 女 氏 枝

猿曳

手鞠

茶中の夜も若〜や代勢
 萬歳の仕事〜お免〜
 万才のま〜や〜児の舞只よて
 茶も〜茶も〜茶も〜
 猿曳〜〜成芳〜
 猿曳の金〜移〜
 けり引〜〜
 猿曳も既〜
 身〜山本〜
 猿曳や〜
 手鞠片〜
 陸奥 越後 江戸 常陸 陸奥

上 七 棟 祖 序 栗 笑 樂 水 市 風 巨 童 有 月 旭 丘 甫 丹 家 丸 黙 棠

羽子

正月 粥杖

似憐のうらまも取れ手数々

越後

笑 産

立湧りくくはく手すれう形

采 木

昔羽子井戸の輪儲屋

越後

因 兼

やうまをたてんらきる松の枝

其 彦

羽子五尺手新工内巻り御足

江戸女

古 翠

実まはらん羽子の字帯よとる花

簪 々

着あくももかし帯を羽子の友

一 具

完多ふ人粥杖子打くもろ全

曾 兄

正月の宵森をくめや八日の松

桐 雨

西のやや清き床のまろう附

湖 山

祝まけぬ西月夜や小四の家

鼎 湖

西のの風をくく海のうら

陸奥

蕨 丘

正月もあをくく人の旅

薪 水

霧屋ふ西月夜や霧の雪

出羽

一 竹

西月や長燈へ通不煙字巻

木 公

西月の忌世より素更質屋ぶ

民 枝

西月夜をくくく重仙智うか

江戸

祖 守

著のきそ西月夜をくく桂う家

越後

鶯 笠

西月やねくくく法家

文 光

西月や去事くくく立や屋束

左 未

西月もあはやあしくく山の水

牙 輪

西月もあはやあしくくおの雨

文 扇

睦月

正月やあつてもある相火桶
下子寝て三匹と吹んあ月式
重過のその生家の睦月式
籠中家内嫌な睦月式
私一寝ふもあ月式
出せ六吹んも睦月式
掌平寝折るあ月式
その忘れするあ睦月式
あさ鷹のひらきあ月式
縄多寝のあ月式
をうーの倍くさうあ月式

大貫 一具 椿海 月峴 多よ女 全 木司 信濃 武藏 易足 貞雄 木司 玄く

小正月

初子日

初を侍くも一担初や小正月
振舞の先も振舞や小正月
松を食ふはあ月式や初子日
竹菴を初も子のあ月式
松の中子のあ月式
了事のあ月式
浜松を並へるあ月式
七種の松子あ月式
七種のあ月式
七竹やあ月式
荒味も七種のあ月式

碓嶺 椿海 樂水 千輪 鼎湖 多よ女 之享 道雄 涼谷 以吉 鼎湖

菓をとりて七州 備后山家

下総

鬼合

七等の板おき 替へてすまゐ

旭丘

舟よりて七等をゆく 板をゆく

積翠

人の夕や 手より 板も手代も

越後

芝蘭

人の夕や 思ふと みるも

常陸

素志

小松曳

五之等 柿をゆく 小松曳

常陸

戴星

株より 妻の 抱ひや 小松曳

道雄

足元を 踏み みるも 小松曳

五岨

小松曳

山あり 舟あり みるも 小松曳

陸奥

藤平

金脚を 生かす みるも 小松曳

太拳

小松おき 袖や みるも 小松曳

有一

養父入

又の 舟あり みるも 小松引

曳を みるも みるも 小松曳

養父入や 帆を みるも 小松引

江戸

千齊

舟あり 舟あり みるも 菜園 畠

杏園

養父入の 舟あり みるも 舟あり

左琴

養父入や 舟あり みるも 舟あり

千輅

養父入や 舟あり みるも 舟あり

双二

舟あり 舟あり みるも 舟あり

永木

養父入の 舟あり みるも 舟あり

蓬亭

傀儡師

傀儡師 佐田の 舟あり みるも

陸奥

素志

餘寒

雪の結もたゞもそ〜ぬ傀假也
古入の解蘊多〜る解を〜
古曆〜る舟の余〜
雪の本のあ〜限〜ぬ解を〜
双方のて目も出ぬ余を〜
柳もよの板き〜春〜余を〜
眞火のもせハ〜元〜のよう人〜
氷返る船小柳の布を〜
き〜返る舟も〜
ま〜ま〜ハ〜春の〜
ま〜ま〜ハ〜ま〜ま〜

出羽 多よ
南部 正令
出羽 碓嶺
石碓
出羽 房湖
江戸 相我
久藏
幸雄
茶静
椿海

氷返

春寒

殘雪

春寒〜は〜は〜
人〜
春寒〜
春寒〜
春寒〜
春寒〜
春寒〜
春寒〜

江戸 謝堂
陸奥 長茂
越後 布席
吏川
千輅
碓嶺
上毛 葛松
武藏 文洲
出羽 一幸
江戸 一具

淡雪
雪解

雪をけや楳ノイ跡る江中
 木の根へ梅をく出くう萱の雪
 雪解の梅をく通る島くま子
 雪をきや岨の立本もきあの家
 雪解の雪をく味し雪解の
 雪解をも足もハ少きく水の面
 雪解の生をくくくよ石佛
 雪解の又まをくく雪解の雪
 雪解の葉畑の雪の解の雪
 小兎の籠をく出くく雪解の雪
 雪解の富山をく出く葉菜

妙子
 丁立
 乃蓋
 布席
 多よ女
 旭丘
 量山
 葺母
 凉谷
 草井
 常陸
 箱佐敷
 陸奥
 江戶

春雪

雪解の雪をくく小水の十五日
 雪解の梅をく山の明
 雪解の梅をくく雪解の
 雪をけや梅をく梅の足
 舟をく舟の雪をく雪解の雪
 雪解の舟の雪をく梅子解
 尺杖も実をく雪を解のれ
 下をく出這入雪をく雪解の
 山甲や雪解の中は梅火の
 雪解の梅をく梅の雪
 雪とくく梅をく雪をく雪

南月
 湖平
 左琴
 雀堂
 云々
 祖所
 友之
 周然
 梅字
 椿海
 武藏
 雪解

春

越後

誼老

遠王帳や以て

長彦

風上の木々々

成久吉

戸を解き鼻は

永男

松栢て度き

稔守

波をえく

高山

朝夕の霞も

篠山

草葉を

祖所

朝の夕

木司

二白より

高谷

紅は

全

陸奥

乙 初

常陸

三 槐

山甲より

杜 丰

名を

茶 丹

物

柳 美

破

稀 角

震

全

茶

毎 女

中

極 好

悪

民 味

先程の震ありとありは改
 持ふ子の一程一はふ震あり
 屋根曹の震ありとあり小里丸
 山つ棟上りありありあり
 生葉の白ありありありあり
 伊ありの松や震ありありあり
 夕震の義ありありありあり
 一おも震あり川のありあり
 震やりの地まじ持たりや五加木飯

南部 東標 西冷 全 全 五 鷹 乳 箱 竹
 下毛 素有 正 破 岫

廿の震ありとあり山の松
 よあやま震ありとあり小松あり
 小田の窟一足はありとあり
 志ありとあり震ありとあり
 柿の木あり伐口ありとあり
 起りけしありとありとあり
 穴窟の洞も震ありとあり
 ハ景の震ありとありとあり
 新ありとありとありとあり
 震ありとありとありとあり
 此屋をさ出ありとありとあり

全 揚 露 李 梅 羽 一 深 雨 竹 登
 花 付 朗 周 白 幸 月 村 里 海

下 越 出 越 江 陸 常
 徳 後 羽 及 戸 奥 陸

長閑

美あももるる生さ時男うれ
 強片しそ出きた軒くく産より
 是も来くく産くく産くく産
 長閑さの情しそ隣歩り式
 出歩りぬ人も長閑とあくく産
 雞の尾もも長閑のくく産
 長閑さもはくく産くく産
 長閑さや所くく産くく産
 又ハめくく産くく産
 長閑さやあくく産くく産
 長閑さの産くく産くく産

江戸 下松
 申女 雨お 蚕浦 柗機
 一甫 一甫 一甫 一甫
 越及 玉和く
 江戸 丁酉女

日永

長閑さや暮くく産くく産
 夕長永く来や木橋の海舟
 長閑さも起くく産くく産
 長閑さも起くく産くく産
 永くく産くく産くく産
 貸借の産産等やくく産
 夕長永く産くく産くく産
 米橋の橋くく産くく産
 永くく産くく産くく産
 長閑さやあくく産くく産
 あり 長閑さもあくく産くく産

粟笑 菜群 千菊 白起 一夢 多よ女 椿海 守序 有仙 有水 葛山

暖麗 遅り

娘も情しけりけりけりけり
 持しものありて一倍々永く存
 あり是事なほほのわたりの永く
 けけのほほ々永き廣く
 長きよよ長心是うけあこたけ
 永きのもあはれ下子基の思案面
 心を永く自然暮佳女々々
 暖いもの志もく々集り集
 親愛仕りりるるやや子拒
 菓子新々々子も是あももは
 是あやや新々々々菓子既

祖
 伸女
 道雄
 今
 考
 兀兮
 南枝
 得蓋
 考
 考
 民枝

芳志 陽冬

友のりりりりりりりりりり
 字声の桐曳衣や芳志
 面毎よよめりりりりりり
 陽冬や洗雁はかぬ寮の井戸
 陽冬や新の物柄を室一丁
 陽冬をも集りるる南田川
 陽冬は何系え厚ん二階式
 陽冬のちをえはれ枯為
 けけけけけけけけけけけけ
 けけけけけけけけけけけけ

武藏 黙菓
 江戶 文来
 出羽 拍樹
 南 清
 貝谷
 理栄
 大梅
 栗笑
 布席
 李席
 野菓

系遊

佐保姫

陽光のくげや 梅屋の落席常陸

くげあやゆけ 大根の玉串五竹

ゆきや鼻柱の延る皮子鞋一車

るきりあや ち何ぬきる植樹あり下弦

系遊やあまし なるまは縁はる椿海

系遊やる孔紫きる籠の中巨童

系遊やあまし あり流きぬ杏園

系遊や女掃き あり穉少上毛

系遊や 懸柱きぬのちる箱根

系遊や 菊きぬ人窓のち旭丘

佐保姫の世並けぬや 白の襟雨芳

佐保姫や 舟の屋敷ぬきる奥及

ゆきやゆきも 系遊の戸口裁星

東風吹や ち 穉のあま東橋

大陣のあまき 系遊のゆき雨村

ゆきのまは 系遊や 系遊のち茶静

系遊吹や けの 系遊の古麻交

系遊吹や 系遊のち 板雁流

春風や 系遊のち 入向大宮

系遊吹や 系遊のち 板箕木

系遊吹や 系遊のち 系遊の風白起

系遊吹や 系遊のち 系遊の風夜雨九

東風

春風

春

越後

阿波

江戸女

東風

又一人まきき春の風
 山風の芳香吹きよるの風
 春風の江の島立や春の風
 春風や夕の東ぬ芳を疎ゆり
 葉風松の葉を吹くや春の風
 春風の庭を吹くや春の風
 秋風を吹くや春の風
 春風の風仙達も留まらば
 春風や人の心を越えぬ
 春風や中坂を吹く夜車

ちぬ女
 麻交
 八采
 清樂
 一翠
 多由女
 久藏
 碓嶺
 五老
 ちるき
 棗く

春雨

毎頃や吹雪を吹く風の
 春風や入船多き湊の
 入舟の舟も来りて春の風
 人の病を吹くや春の風
 春風も旅の舟や春の風
 古葉を掃くや春の風
 春雨やあなを上空に吹く
 別荘や丸く吹く春の風
 春風を吹くや春の風
 春風を吹くや春の風
 春風を吹くや春の風

貞雄
 松秀
 永男
 惟州
 舞母
 大費
 一具
 たる紀
 茶静
 椿海

丹下総より江戸へ掛九
 春江戸自八重女や素考市陸奥へ文呂は常陸四一里雨を松半尺山
 春自松や尺山父文呂の一祀雨名松の尺山庭文呂の一松雨
 春自松や尺山義文呂の一お雨く松来尺山横文呂ち一
 初松と尺山初文呂ら一菓雨子松考尺山も文呂其一乃雨其松の尺山面文呂
 初松を尺山惜文呂る一餅雨持松り尺山春文呂の一雨松
 菓尺山苗文呂の一約雨束松を尺山そ文呂や一春雨の松面尺山
 春自松や尺山大文呂輪一を雨来松し尺山宿文呂の一家松
 春の尺山根文呂を一曳雨て松留尺山る文呂乃一春雨の松面尺山
 春自松の中尺山も文呂も一糖雨の松布尺山を文呂り一我松
 春自尺山や文呂燒一米雨片松を尺山世文呂に一春雨の松面尺山

下総 掛九

陸奥 文呂

尺山

松

得蓋

春自上毛や松袖尺山を文呂り一小雨枕松灯尺山
 春自松の中尺山や文呂与一平雨う松送尺山り文呂撰一
 春自松の尺山留文呂る一鳥雨の松脊尺山中文呂う一れ松
 一尺山卵文呂の一春雨を松打尺山出文呂る一乃雨春松の尺山雨文呂
 春自尺山若文呂て一亦雨多松春尺山自文呂の一際雨を松危尺山
 春自尺山や文呂世一に松保尺山ち文呂る一乃雨菓松子尺山依文呂
 山尺山ち文呂や一何雨よ松も尺山多文呂く一春雨の松面尺山
 春自尺山面文呂や一慈雨し松亦尺山里文呂の一灯松を尺山考文呂
 春自尺山よ文呂く一も雨多松ハ尺山春文呂の一物松を尺山考文呂
 春自尺山よ文呂具一那雨ち松も尺山花文呂春一の松枝尺山
 雨尺山霞文呂も一つ松も尺山春文呂を一初松り尺山春文呂

上毛 松

陸奥 久藏

今 鹿

二晶

新多ぬ鳥の赤や春の雨
 二の尻のふ積りも春の雨
 要持と需はる春や春の雨
 くるはまの木の空や春の雨
 障さうと地の並のや春の雨
 春の雨の後の舟おや小松の
 空のまをともぬ雨や春の雨
 春の雨やけりも福糖まう
 夕暮も藤おは積りや春の雨
 後し持も需をらん春の雨
 春の雨の中も春の雨一在交

箱彼 不曲 長亮 崇平 陶烟 不流 乙真 蕪母 愚本 以交 越及 江戸 越及 出羽

山中

春の雨や折枝々々を料理の旨
 春の雨の節を走ぬふ二の雪
 小虫々隣 呼吸うたむの鳥
 肉々々々 能くもくもく 春の雨
 春の雨や持鼻をさるる 春の雨
 春の雨のハるを待や春の雨
 春の雨の禱 軟倫て春の雨
 春の雨も松の木の空や春の雨
 春の雨も横らも春の雨 春の雨
 春の雨の障りも春の雨 春の雨
 春の雨のさるとおはりや春の雨

一竹 芭角 毎文 酒好 左琴 一甫 西令 梅今 云々 蚕浦 云々

わくくしと申物を初代と云
江戸
江戸の跡を以て云ふは元徳の巻
初代江戸より後を後と云
物々や吉博の松より江戸
江戸物より江戸の中や角力五
江戸より徳を海客舟に結ぶを
鹿より物も後くくつきのあり
右鼻の形くくつきのあり
きれ江戸の果やあましの草の寄
かき江戸や柿の木後てあり山
つきのありかきまきしまのの上

庚年
夕山
南内
戴星
若谷
若帆
若舟
若旗
若名
若山
山笑

若菜

江戸の尾より上より旭これ
たや二人ゆりやわりの畑を
戸口より空を物係る若菜式
有觸と物の目出なわられぬ
茶島や若菜揚りし唄あり
わくを揚人としてゆや後まき
提てきて船も異なる若菜式
揚りてく提も程伸るわく赤舟
提てく提も若菜も似れ結ぶ
若菜揚りて松のそよよを提
提てく提も若菜も似れ結ぶ

若丈
抱琴
若帆
道雄
若之
今
羽白
雨村
左未
史干
一具

陶り氣子家々々々構わふ式
 揚々東のののの若菜れ
 組木の香々々々々々々々々々
 一々々々々々々々々々々々々々
 有金子子あまぬ美やわづれ
 伴ひて何るやういふやあ菜れ
 肉室の子後上出々々々々々
 香若菜人々々々々々々々々々
 川初々向々々々々々々々々々
 一白々々構々々々々々々々々々
 恒城上々々々々々々々々々々々

常陸 上毛 一 龍 石
 松 鳩 布 痔 民 湖 八 朗 右 抵 左 右
 信濃 五 民 湖 八 朗 右 抵 左 右

茶

薺

船師も眼を寄々々々々々
 如如々の香々々々々々若菜構
 多々々々々々構々の若菜構
 壹処一々々々々々々々々々
 一々々々の薺構々恒中々々々
 一侍々々々々々々々々々々々
 船をぬけた世方の英々々々々
 世の中の能々手好や薺 構
 夕留々々々々々々々々々々々
 人の能々上路々々々々々々々
 薺打てた々々古菜も若菜也

箱波 愚本 如蓬 右機 一 椿 海 桐 雨 法 風 以 吉 三 槐 南 湖

出みのみち自出なるる葛は
字もすくは時刻をのきの葛は
片白の中へ葛さく薄くさ
粗梅の足入習うるあつちり
口上を交あうす葛うな
荒くてもさうぬ島の葛うた
州の戸やそ中人葛も葛は他
蘇赤考のときまや人西
組梅へのや目やな葛う今
くく上守くゆくも来う葛葉
お隣り車屋をゆゆや葛くを

卓郎 素樸 雨撞 貝谷 民枝 羽人 雲翠 殖花 政香女 夕山 芳谷

出羽 羽根

武藏

信濃

土筆 下葉 芥菜

いへ来子範もましく葛葉
葉と梅の何か見えなく葛は
葉うやうな重なるる葛うた
梅とまの菜斗ふ葉葉うな
半分の梅も葉よす葛は
塗をまよ土夏くく葛は
密河毛の梅竹く梅田芥は
まよるくくと芥りまふ入芥は
凡の香の芥田まをを芥の何
梅を来根芥に交る少梅葉は
梅ゆよまあくと芥向の梅向は

竹葉 赤葉 玉和久 禾木 大費 野棠 大梅 挑馬 羽人 菘木

江戸

女

佛聖 娘菜

鶯菜 下萌 土筆

芥搦花を煮きしえの味なる

何よも少し搦急仙の生

ちくちく嘗てしつ初菟菜

搦しつて嘗てしつる菟菜

鶯菜名の佳しき嘗てしつ

下萌や夕ま向くおく鰯の尻

搦搦し土筆の上や生れし

一校乳母の飯中人はつし

咳くとも出くともいふや土筆

土筆七食の煮のまじり

搦多のし取し土筆の七種

先くか海あま里の土筆

搦沙凡はつてま面くわん

搦あまの不二を搦きん土筆

片くし取やはあま搦るは二つ

あまふしを煮るや片くし

夕新まそきの跡に土筆が

わんくしあまの搦搦や土筆

煮んくまそきつろは之七筆

此の中を片し搦しはつて

は蔭の蔘搦てあまの白化が

うま何畑の土のまじり蔘の蔘

下徳

一甫

二晶

下徳

一蕙

斗圃

春及

陸奥

宇磐

忍山

多よ女

丹湖

宇弘

陶畑

落莖

不流

常陸

薪水

東止

陸奥

竹秋

あま女

祖母

梅宇

上毛

南技

岩水

碓嶺

一具

春

落芽
若州

落の芽をさしてさくも忘る也
新燈を撰ふは落のさく
中作らうと玉の神くや落の芽
あつくと木小をのらや落のさく
山甲のまらくあまら落の芽
ゆくくと木のさの中や落のさく
こく香く樽へさるやあまら落
落のさく林うほさのたけく
落の芽やさるのさぬさるさ
わく州やわくわくさくさくさく
落のさく若の芽へ世に送

常陸

江戸

出羽

一 横
才 乃
忽 山
多 小 女
浮 石
只 亦
素 心
之 直
蓬 多
庭 雨
云

福壽州

美州や落芽例を若の芽
わくまや中かあま 万の下
わくまやわくまの落の芽
あまのさくつとさくさく 象 竜
若草よさくさくさく 兔 丸
若州よさくさくさく 足 俗 の 所
わく中のく落の芽や落 菴
あまのさくさく 持 たり 一 持
わく州や落芽あまの落 湯
市局のあまのさく 福 壽 州
蒲團のあまのさく 福 壽 州

出羽

下 佐

常 陸

節 之
美 文
古 翠
四 明
五 風
多 小 女
落 雨
陶 烟
有 水
涼 谷
季 席

木芽

立る芽子將あてしとや福寿中
 行燈の芽く持先ん福壽字
 芽々く土の乾くや福壽字
 葉の有るは身持く福壽字
 二つくとあるは身持く福壽字
 葉の芽を店く上く福壽字
 節遠よりおさく直や福壽字
 穢れ芽を芽比ふ芽く福壽字
 七縁は之木の芽の中へりて
 小冠をの木の芽のや木の芽
 芽を向て芽の木の芽

陸奥

日人

荷乙

積翠

乙之

乙痰

孔正

節之

鳳毛

芝茶

木司

左琴

芽々の丸を腐く木の芽
 禅士の竹の筵る木の丸を
 石の葉のあつても候し木の丸
 芽葉の芽を芽を芽の芽
 今芽もちや芽の芽の芽
 気の芽のいへ候も出はる木の丸
 右葉赤植芽くや木の芽
 鴨小豆のつん曲き木の芽
 とんと芽の芽の芽の芽
 爪先く候の芽の芽の芽
 木の芽の芽の芽の芽

陸奥

祖行

露什

笑壺

美文

鶯御

伸女

乙負

大費

茶靜

千齊

三平

梅

古曲梅く生く近き木の青く花
木の青くはやく深山に能く訪
朝夕の木の青も又花は少く
青を流く木の青れをの世く
と雲の葉青く梅を世に
祚也や旭一雲に梅の心
梅の心を確り花を恒福くれ
四五梅を流るる音や雲の梅
飛くよ家何る里や葉の青
志くよ雲の梅の心梅又我
梅の心を流るる斬もく火の心

〇三

有水
不流
羽人
七夫
一蕙
谷徒
茶新
後菊
英山
志紀
一具

武藏
江戸

赤修をふりてあまも梅の心を
出運に梅後くく舟より
風よりや梅の心を流るる
客人よ雲れく梅二まん
舟より梅の心を流るる
舟を流るる梅の心を流るる
ちねとく土も乾くや梅の心
朝夕の木の青く梅の心
梅の心を流るる梅の心
梅の心を流るる梅の心
梅の心を流るる梅の心

史千
芋所
凉谷
一翠
懸巢
う付こ
栢樹
八重女
春路
凉谷
椿海

春

梅の鳥やよくとし花をいそがし

江戸

右橋

赤梅の鳥をそとせし梅の花

江戸

笑語

何れとなく白く赤く梅の花

江戸

宗川

梅の花や赤と白とぬきよう

江戸

市石

板敷と梅と並にぬきの中

陸奥

聖栄

片はらり赤梅の第や梅の花

陸奥

天年

赤梅を踏死とて梅の花

江戸

扇和

梅の花や赤と白とぬき

江戸

白桂

梅の花や赤と白とぬき

江戸

聖栄

葉梅や梅の花や梅の花

江戸

東外

而して梅の花や梅の花

陸奥

嵐翁

育目や白くして梅の花

陸奥

米月

此梅も赤梅の花や梅の花

江戸

忍山

若くも赤梅の花や梅の花

江戸

文交

山の花や梅の花や梅の花

江戸

福平

花梅と梅の中より梅の花

江戸

一雨

人の梅の花や梅の花

江戸

今

梅の花や梅の花

江戸

五風

梅の花や梅の花

江戸

抱儀

梅の花や梅の花

江戸

右

梅の花や梅の花

江戸

右

春

桜の隣りもや字々の花
 梅もまた義々をさす成る能
 梅枝を鮎原の華よりる舎
 う免の舟立早舟も七さうなを
 新の穴立ち急極や梅の毛
 穿の穿を梅の内より梅の花
 吹雪の井の根原しうめを
 の花さうとりはさるるや梅の花
 麦柵の中此や梅や梅の花
 破の梅はしくいそ仕花を
 書てはほろろをさるるめり花

三 櫻
 女 木
 松 棠
 江 戸
 杜 賞
 白 起
 飛 得
 ち ち
 今 得
 得 甚
 麻 交
 采

梅もまた義々をさす成る能
 梅枝を鮎原の華よりる舎
 う免の舟立早舟も七さうなを
 新の穴立ち急極や梅の毛
 穿の穿を梅の内より梅の花
 吹雪の井の根原しうめを
 の花さうとりはさるるや梅の花
 麦柵の中此や梅や梅の花
 破の梅はしくいそ仕花を
 書てはほろろをさるるめり花
 梅もまた義々をさす成る能
 梅枝を鮎原の華よりる舎
 う免の舟立早舟も七さうなを
 新の穴立ち急極や梅の毛
 穿の穿を梅の内より梅の花
 吹雪の井の根原しうめを
 の花さうとりはさるるや梅の花
 麦柵の中此や梅や梅の花
 破の梅はしくいそ仕花を
 書てはほろろをさるるめり花

久 未
 南 々
 今 一
 一 夢
 今 全
 陸 奥
 傳 示
 季 州
 松 月
 栗 笑
 今 今
 布 席

原中やさしめておと梅の花
臣毛有る梅並し電舟の中
一ツはくもも梅の香をき
まのやうな子も恋して生じ梅
羨の梅もきき巻くく男の能
雪の氣を離れて梅のそくれ
宿の心は梅出ん梅の葉大
つきの空あしきや梅の香
梅さくや雪の香う香の密
又とまゝ人未だ折ぬ糸の梅
待つてと暮るも梅又女の心

多と女
今
雨撞
今
原
大梅
永木
右
久
藏

ちと女子来や梅人の雪踏み
山男や人手もくく梅の香
梅の香や第一の先の梅舟
折の香出しく梅の香
う失くまやゆりの利ぬ花の香
一人片く進み来りる梅の香
影も心ゆるより梅の香
来てくせ八宿の梅も梅の香
守ふれつよかあき梅の香
梅の香畑踏まわつあおす
あま返りてきんも異う梅

宇
維
民
花
民
碩
廣
守
三
多
鼎
湖

陸奥

相模

録喰の赤やをまきて梅の
茶菴の似たりぬ様や梅の
喰あり茶菴の色や梅の
大根の干場をまよ梅の
てや竹の燧も解る梅の花
生ともまき得るまよ梅の
梅まよくまよ一七の梅の
茶菴のぬ伏屋もあつて梅の
尺垂を六茶を何れ梅の花
茶を斗一海やぬ茶あつて梅の
節やも茶の味し梅の事

陸奥

文宵
夕是
古玳
ちき
大貴
今
川長
錦哉
葛松
隸く
茶の

下松

山道の雪隠廣く梅の花
よま梅を皆江の向や梅の花
鳥羽玉の粒の粒茶菴の花
梅まよ風の石をまよ山家
おまよ杖の梨やうめの花
梅の木の香茶の味しお川の
梅まよや杖まよわく本茶
ふ二と梅と茶菴まよ梅の
ちり急まよや梅の花
梅のまよわくや梅の花

箱館

松秀
殖を
不曲
永思
陶烟
ぬ蓬
石苻
惟州
龍化
篠尻
旭雲

紙帽してさるや緋の黄ひ梅
 梅咲て梅もあまやう也うれ
 粉中 迄骨さる梅の月
 去手あう月のはな義の梅
 少く母月あのはくや梅のや
 行先の不二の梅の香
 茶の物の傳子あは之來のをも
 春の心を梅の能ぬ梅の月相ふ
 梅咲や夕暮を茶お後し
 一曇りて梅の香の増う危
 梅咲て梅の香の増う危

江戸
 易年

旭雲
 華母

上七
 碓嶺
 茅丸

壺半
 阿兮

羊山
 千之

松井
 易年

梅咲あまをさるや梅の香
 夕暮さる梅あまをさる梅の香
 ちあまをさる梅あまをさる梅の香
 是うさる梅あまをさる梅の香
 梅の香を梅の香の香
 松さる梅あまをさる梅の香
 梅の月あまをさる梅の香
 言の月の香を梅の香
 肉の月の香を梅の香
 山甲の下を梅の香
 梅さる梅あまをさる梅の香

今
 夕山
 常陸
 南石
 柳平
 東止
 古川
 月る
 芳谷
 碓嶺

梅之烟之香之氣之華
 梅之影之香之石之空之信
 之氣之自來之確之其之氣
 六甲之其之由之其之梅之也
 梅之其之梅之其之其之其
 有之其之松之造之其之其
 遠之其之其之其之其之其
 狼之其之其之其之其之其
 古梅之其之其之其之其之其
 小梅之其之其之其之其之其
 其之其之其之其之其之其

陸奥

稻 河
 今 今
 五 空
 竹 秋
 友 之
 今 今
 雀 堂
 今 今

梅之其之其之其之其之其
 其之其之其之其之其之其
 其之其之其之其之其之其
 其之其之其之其之其之其
 其之其之其之其之其之其
 其之其之其之其之其之其
 其之其之其之其之其之其
 其之其之其之其之其之其
 其之其之其之其之其之其
 其之其之其之其之其之其

出采

常陸

皆被

其 其
 道 權
 今 正 令
 今 今
 吟 庭
 五 竹
 尚 古
 一 陽
 一 有

梅の屋家よ他人を去るる花
万手の白く居り梅の香
花娘の足俯し梅の香をれ
梅の香を梅の香を梅の香
梅の香を梅の香を梅の香
梅の香を梅の香を梅の香
梅の香を梅の香を梅の香
梅の香を梅の香を梅の香
梅の香を梅の香を梅の香

五 峴
三 槐
抱 琴
松 怒
祖 戸
蚕 浦
祖 戸

春
梅の香を梅の香を梅の香
梅の香を梅の香を梅の香
梅の香を梅の香を梅の香
梅の香を梅の香を梅の香
梅の香を梅の香を梅の香
梅の香を梅の香を梅の香
梅の香を梅の香を梅の香
梅の香を梅の香を梅の香
梅の香を梅の香を梅の香
梅の香を梅の香を梅の香

素 志
孔 正
今 正
今 正
今 正
今 正
今 正
今 正
今 正
今 正
今 正

梅形まきまき玉之似し人のあり
 明く候梅より入るや梅の初 越後
 としつと笑なきや梅の花
 もふや 水戸 暮るる庭の梅
 梅咲や酢原も酒屋も新海
 梅のや白くも魚の若狭哉 水戸
 く欠る香の積をんをる松之危
 幹梅の梅一こつ子咲まふり
 梅を羨翁と梅の咲くうれ
 葉の中子付てもみても梅の色
 愛あもあふくくく梅の色

水戸
 二丘

辰物をとる灯のさしや梅の色
 手よまの何あまも早し梅のあ
 衣をてし襦袢はや梅の花
 咲くめの梅より新刻男うき
 横舟を海へて留まや梅の花
 梅の月をくみ初を森と改め
 ありの本をよみ初をく梅の月
 梅咲や坐家の茶を内一掃
 為月子去つてゆく梅葉も
 戸ぬせの梅の白く初くく
 梅ちややくくくと鉄の音

越後 笑壺
水戸 二洞
水戸 岩釜
水戸 巨壺
水戸 古翠
水戸 千輪
水戸 休圃
水戸 庚年
水戸 山権

朝の月梅より遠き
 朝起もくちの年を此梅の
 畑の井に傍る打音や梅の
 一二人舟より出るや梅又連
 片舟くと常掃く新の梅
 笛舟に梅の空や貸ふ人
 掌子書して梅又の使うに
 梅の何る内や梅又のきう
 吾の写やあやう梅何る構
 何る上子黄あて梅一梅の
 先梅の在処名事や梅の

茶路 竹里 周徳 田英 禾木 古 蚕浦 大貴 大貴

野梅

田の非れあやう梅の
 畑の梅や梅子エのあやう
 尖るくもくねるをね梅が
 雲をすまると梅の一ツ咲
 菫より二月一すく梅が
 梅もく先くねる梅が
 畑の梅より春るや朝の内
 畑の梅より春る梅を
 曲る梅のわのあや梅
 畑の梅やわの梅の折
 菫よりあや梅の比

全 昨木 斗圃 乙真 月岨 全 粗年 民枝 石符 薄平 田菫

白梅

紅梅

梅命一丹波の雪の降る付
去梅の雪を解くを氣をぞ
白梅の柳々やみの眉ふし
月夜て去梅斗梅まらう
去梅や旭生女の雪の尻
去梅やその志正あううう
余の志と白梅のまう若殿が
紅梅やみ餅あうは五元ち
紅梅や畑又通ひち梅

常陸
管轄

う屋
羽人
壺井
八重女
雅柳
醫保
李朗
蚕圃
社平
妙子
旭

柳

柳柳や春をくく柳の雪の
玉簾や柳梅の色あうう
お栗や村まもるうあう
紅梅や刺五元を一の客
紅梅を成り梅あやうの庭
枝あうま喜喜あま柳が
はやくくく柳の柳々梅れ
柳うま春やうくはもま柳が
了出りや柳芽まらつて
秋去の柳を荷片今柳う
春火のまらうては柳が

柳木
五岷
涼前
秀竹
梅空
雅柳
芝菜
芳谷
孫阿
今
木司

春

青柳や下ゆくゝの青煙

下徳

植着女

秋を此柳して行 柳を

竹葉

借るく光る藤屋ははる柳は

雀堂

橋うへは是路ゆはぬ柳は

字響

余母の田こし出撃ま柳は

荷乙

古きまんのはをぬやあきし

字響

は橋の層根舟はく青は

涼舟

海苔藤桑の中著るは柳は

五岬

瞳まの隣りの柳は是は

吟露

夕紅あすすくは近ま柳は

文廣

五去しを毛の柳の糸は

文和

菘の面よりゆるゆるあま

寛里

枯きぬうちよ真ま柳は

五岬

大柳 中ま記ちも中へ

去

層根菅の絡は上る柳は

旭

是代の柳も来柳は

梅周

ゆりくと柳を

如光

茅柳や南隣を明や

了死人

隣地を丸く抱也柳は

蚕浦

多由安人何うち子の遠柳

全

すくふ物二月よもなき柳よ素
何延持とるせんきく世并遠柳
旭のくふ程くく来鹿柳の昔
一夕片く木の方く健多く柳か
壁より純りのみきく遠ふ柳く乳
舟は夢しききつくく柳く素
ぬく色も拵くく柳く柳か
女く侍風の素傍やあまうれ
持あくと素の船くく素く素
宮柳よ素人四の勢古く素
晴くく柳かあくく柳か

一橋
素笠
素志
今 拵海
今 節之
今 梅序
田兼
孔正
涼谷
一具

譽くくくくくくくくくくく
四五折の在交相く柳く素
立素まの二ある廻く柳く素
素くくくくくくくくくくく
素柳子家の素碗のふらふら
二くくくくくくくくくくく
房素まて風くくの通く素く素
素柳子くくくくくくくくく
素柳の中くくくくくくく
素柳やあくく向文を為目松
川上の侍も届くくくくく

一橋
相る
熟棠
二侍
八重女
桂丸
十箱
宗川
扇卷
今

一解の正字はさる。柳は
 二甲をさる。厚紙と好。奔。春
 破。春の声より。初。く。柳。れ。 江戸
 現。く。ら。井。原。の。庭。さ。る。柳。さ。る
 一。解。よ。さ。る。の。足。さ。る。ぬ。や。あ。き。か
 海。の。字。さ。る。の。氣。さ。る。柳。れ。 杜奉
 籬。み。く。を。持。さ。る。ぬ。柳。さ。る
 解。よ。さ。る。ぬ。さ。る。解。よ。さ。る。れ 杜賞
 春。物。や。情。の。息。さ。る。れ。上。り
 乾。く。写。さ。る。の。難。け。り。 其死
 持。さ。る。の。足。さ。る。ぬ。や。あ。き。か 其笑

大。石。の。庭。根。を。足。さ。る。の。柳。れ
 舟。の。面。杖。を。近。さ。る。奔。り。さ
 所。さ。る。の。足。さ。る。の。ぬ。や。あ。き。か
 大。石。の。庭。根。を。足。さ。る。柳。れ 布席
 春。柳。の。庭。さ。る。ぬ。さ。る。れ るよ女
 春。柳。の。不。さ。る。物。さ。る。田。の。社 今
 條。さ。る。の。持。さ。る。の。茶。の。柳。れ 鼎湖
 春。物。や。情。の。息。さ。る。ぬ。さ。る。 大梅
 舟。の。面。杖。を。近。さ。る。ぬ。さ。る。 下然 狐出
 春。柳。や。秋。の。庭。さ。る。ぬ。さ。る。 卓郎
 舟。の。面。杖。を。近。さ。る。ぬ。さ。る。 民校

仙舟の海に遊ばるるやあふれ

陸奥

岸沙

春柳や羽織のよき土手の上

陸奥

三平

春柳や縁石の外の外侍

春考

春柳をよびくぬく柳の心

春雄

春柳をよびくぬく柳の心

仙

春柳の心よき柳の心

貞雄

春柳をよびくぬく柳の心

長彦

春柳をよびくぬく柳の心

永男

春柳の心よき柳の心

松栄

春柳の心よき柳の心

水

二羽津の心よき柳の心

大梅

春柳をよびくぬく柳の心

子井

春柳をよびくぬく柳の心

文光

春柳をよびくぬく柳の心

今

春柳をよびくぬく柳の心

羽衣

春柳をよびくぬく柳の心

西阜

春柳をよびくぬく柳の心

千輅

春柳をよびくぬく柳の心

双二

春柳をよびくぬく柳の心

桃棧

春柳をよびくぬく柳の心

全

春柳をよびくぬく柳の心

南校

春

明景の下に志所を 柳にれ
 伸るも月夜をえり 奔りや
 八考此 出も 柳の 春 成らる
 新も 金 土 土 勢も 柳 成ら
 葉 火 焚 標の ありの 柳 森
 隣 天の 雲 人 多の 眼 ぐ や 多 志 元
 阮 彦 元 隆 中 や 柳 の 一 枝 志 元
 岩 多 志 元 一 吹 雪 志 元 志 柳 志 元
 志 多 志 元 や 柳 志 元 柳 志 元 柳 志 元
 何 処 志 元 志 元 志 元 志 元 志 元 志 元
 志 元 志 元 志 元 志 元 志 元 志 元

南枝 雨考

大貴 行九

今 蚕浦

木 司

乙 負

乙 嶺

江戸

陸奥

挿柳

松花

春

何れも あり 一 枝 柳 志 元 柳 志 元
 何れも あり 一 枝 柳 志 元 柳 志 元
 何れも あり 一 枝 柳 志 元 柳 志 元
 何れも あり 一 枝 柳 志 元 柳 志 元
 何れも あり 一 枝 柳 志 元 柳 志 元
 何れも あり 一 枝 柳 志 元 柳 志 元
 何れも あり 一 枝 柳 志 元 柳 志 元
 何れも あり 一 枝 柳 志 元 柳 志 元
 何れも あり 一 枝 柳 志 元 柳 志 元
 何れも あり 一 枝 柳 志 元 柳 志 元

上毛 茶徑

田 翁

貝 谷

椿 海

宇 桂

赤 蕨

八重女

江戸

松 付

里 竹

碓 峯

椿

松のむ月こく古う只お初夜
す片の香燈根をぬけ出さ古樹より
新りの志ありう片くや松のむ
田も作る醴酒や未夜もき
掃よきてるよおくも椿く柳
雲白の影の初のはも文式
る曉して戸く一袖の椿りれ
義よりほもおも家の借り春
一月ももるく又く椿り春
ちく出く椿えをく小唄く
葉りこは椿やひの初椿

〇四七

常陸

陸奥

麻交
八采
若薙
夕山
素
香
木
道
松
田
梅
文
風
涼
素
涼
熱
全

一
傀偶所出をりあま子ちる換
空也ちり春とくも同く椿り
折とまの是の少文片をき式
一ッ片くよんくくわくも椿り乳
義の換りてをくけく咲く危
下支の双六をぬか椿り文
黄も也程持くくも椿り
つそきとて咲くも雪降山を色に
古繪るは椿れもせぬら椿りく
極春のくはくくもや未換

全

松
田
梅
文
風
涼
素
涼
熱
全

春

志の人の名れを捨つ梅くれ
層根の上は梅をきく殿の内
踏ふも梅多めでて重花を重
中絶ておと一版はほるを式
実辨茶梅候く梅のわね
まけしをそふを梅を梅を
煙霧の向ふまを梅く梅
子折梅の義本葉し梅
枝おき六葉斗跡を梅く梅
五月の七日山家梅梅をまう
あはれ梅の真を梅く梅

八重女
於巢
米月
祖印
乃華
原序
古武
古き
羽人
確花
古花

落椿

梅の丘定く梅や梅あはる
梅く梅く梅く梅く梅
梅く梅く梅く梅く梅
梅く梅く梅く梅く梅
梅く梅く梅く梅く梅
梅く梅く梅く梅く梅
梅く梅く梅く梅く梅
梅く梅く梅く梅く梅
梅く梅く梅く梅く梅
梅く梅く梅く梅く梅

一 相我
三 槐
乙 貞
乙 負
川 長
乙 湖
乙 湖
乙 湖
乙 湖
乙 湖

猫戀

唯禮の身をそとすや落梅
 猫の恋第「く」稀「の」け「は」花
 少「は」も「な」ま「あ」も「あ」ま「は」猫の恋
 う「は」花猫何「あ」あ「あ」も「あ」世「あ」
 福徒の先「あ」つ「あ」ま「あ」猫の恋
 大船も「あ」あ「あ」あ「あ」猫の恋
 猫の「あ」あ「あ」あ「あ」止「あ」あ「あ」
 大川も「あ」あ「あ」あ「あ」猫の恋
 大川も「あ」あ「あ」あ「あ」猫の恋

甫也 一具 谷後 然棠 方居 逢流 謝堂 麻交 布席 多あ女 未未

白奥

白奥

妙「あ」あ「あ」あ「あ」猫の「あ」
 片「あ」あ「あ」あ「あ」猫の「あ」
 無「あ」あ「あ」あ「あ」猫の「あ」
 悪「あ」あ「あ」あ「あ」猫の「あ」
 病「あ」あ「あ」あ「あ」猫の「あ」
 恒「あ」あ「あ」あ「あ」猫の「あ」
 妙「あ」あ「あ」あ「あ」猫の「あ」
 悪「あ」あ「あ」あ「あ」猫の「あ」
 作「あ」あ「あ」あ「あ」猫の「あ」
 亦「あ」あ「あ」あ「あ」猫の「あ」
 唯「あ」あ「あ」あ「あ」猫の「あ」

花女 三平 旭丘 不曲 万里 阿兮 自岷 常陸 岩和 赤白 暮帆

白奥

五巻の内妻もむき右男猫式
 畏片を憐れむはるや猫の恋
 猫の恋屏風の内のる祝詞
 患猫の跡を海より白小袖
 る新くまきまきしは患猫の患
 通ひ来く此方の猫と家上電
 下跡足跡裏く中や猫の患
 一寸のんくまきく公ありた
 志しきや細守をまきの色
 五巻の来りし調交あるは
 恒施りし志しきや根来儀

素心
 五岬
 田葉
 若水
 菅笠
 今
 浪翁
 田葉
 林雪
 宗川
 才石

百千鳥

鶯

白奥の嫌のくえや柳の惜
 万千鳥山此咲くもあは
 若きや面先か子推くもと
 うつひまや燕利くちもまとの井
 鳴くもを鶯かね他のつり
 鶯や御中のおせむ下り
 飛去のまき鶯形くまき若き
 若きや古くく切通し
 うつひまやわくたはあせと鶯ん
 若きや侍子一布をほもよし

湖山
 花甲
 下若
 一皇
 史子
 涼谷
 若水
 南流
 相雨
 一具

百十

管や小首お袖つて鳴きん
くんはまの梅一と生え色
たのききと初管や祚のあ
黄や上一面片のゆききうに
管や余れりも古本ぬ身の搖り
くんはまのゆきき初山
黄ややまの旭のあち花一
管や那をもちも菴の尾
くんはま此出めけと菴や良商
管ややうとや居や銭歩い
管やの初きとゆきき初

一 荊
八重女
真路
陸管
一 菴
妙子
方居
十翁
公桂

管や古柄ありん梅の介
管や新柄うける杏の翼
管やね里や管やあしき
管やちんとい子付の襦子
管やちや管を下まて鳴
管やちや管を奏の梅りわ
管や此鳴や二月きて二月あ
くんはまの初管や新を並けて立
管や尾形もよく新のきく
管や尾下管や一相岸式
管や尾もけりね舟の例

越屋

一の英
陸管
陸管
松竹
大宮
古拳
何年
麻衣

黄子志て加茂まゝ来り危
管や孟より例を高く
白出して管鳴や枸杞の中
くんをきつてすまらや一歩法
船白の止黄子の遠きこれ
管の二羽集を一月をひき
黄子子船集の白をくくを危
管の鳴くあは羽振く
黄子此来ぬや室の忍山
出まのゆ管きあもひん交
内かよ黄子のあくを危

荷子
今
今
一
今
栗笑
異洋
布席
あよ女

よれ世むけの管を危
管や片のり振子小律の
管の一ツ鳴けいよと初るの
鳴振を管住連よからきり
黄子の初音ゆりて振情
くんをきつてすまらや一歩法
管の二羽集を一月をひき
黄子子船集の白をくくを危
管の鳴くあは羽振く
黄子此来ぬや室の忍山
出まのゆ管きあもひん交
内かよ黄子のあくを危

氷谷
久藏
木
木
民枝
頑布
文書
曰人
幸雄
ちうき

陶ろふとほまの常の夕言式
 黄老よとあもふちる古葉成
 常の明持とあはる初考
 うんたや丸まを禁禁禁
 常純明の所性まうる徳々
 黄老や明もそ来もあのみ
 うんたまうるうく這入隣我
 旅路一常一思くはく
 常の娘あつ葉あつ叶の
 黄老よとあもふちる古葉成
 常の明持とあはる初考

大貴
 旭丘
 暮松
 ぬ仙
 鹿翠
 松秀
 今
 松宗
 雨明
 花甲
 常

曾佐

黄老や飛をあはる初考
 常の明持とあはる初考
 黄老よとあもふちる古葉成
 常の明持とあはる初考
 うんたや丸まを禁禁禁
 常純明の所性まうる徳々
 黄老や明もそ来もあのみ
 うんたまうるうく這入隣我
 旅路一常一思くはく
 常の娘あつ葉あつ叶の
 黄老よとあもふちる古葉成
 常の明持とあはる初考

本司
 瓶乙
 権持
 政為女
 石持
 乐水
 昨木
 元分
 松和
 二丘
 南山

陸奥

出羽

鶯の聲をきくは鶯の出む
 うは向ふ鶯を聞くは小雀の
 鶯の鳴るやうなるはさうの
 梅のつぼみは鶯の笑をぬか
 西の山は鶯のやうなるは竹の色
 鶯のやうなるは小雀の眼くは
 鶯のやうなるは小雀の眼くは
 鶯のやうなるは小雀の眼くは
 鶯のやうなるは小雀の眼くは
 鶯のやうなるは小雀の眼くは
 鶯のやうなるは小雀の眼くは

笑 壺
 西 阜
 一 陽
 一 田
 一 陽
 一 幸
 一 深
 一 子
 一 双
 一 文
 一 柳

鶯

鶯のやうなるは小雀の眼くは
 鶯のやうなるは小雀の眼くは

柳 鶯
 木 浦
 蚕 浦
 吟 鹿
 今
 涼 谷
 布 席
 多 女
 民 校
 如 蓮
 柳 鶯

雲雀

徳家の心探しけや春の声
響るもあまやまを雀の柳を危
舟の櫓の梅子梅のや柳を雀
探るややまを雀の鳴通し
月代の刺んより鳴る雀
兄定てうらや兄安よあまや
春喰らえおの気も入あけり
川世の生いともあけり
大空の雲雀出さる下四ノ歌
あまのまを宮中廣舟よ梅を雀
梅子代を雀も鳴る也梅の上

雨 明
柔 静
一 山
里 舟
日 人
真 雄
松 秀
雲 翠

梅の中を鳴る梅子代を雀
あけりやう咽春のうらや下三ノ合
柳の空を雀をうを遊子登る人危
陰多しをうは仕梅や柳を雀
ちる花もあまや鳴るあまや
梅子の中子見るとんを雀大
かゝるの个上を宮中柳を雀
とあまも春の梅を鳴る雀
下三ノ合のうらや上を舞あけり
雨気長く日利も春を梅を雀
先客も見ても春を梅を雀

政勇女
荷 乙
嶮 洋
竹 花
柳 美
芳 谷
涼 荷
梅 序
寛 里
全
旭

麦圃の二ヶ玉並み空を雀も
て就の如き是廣く雀も雀
高き子雀く廣く雀も雀も
雀も雀も雀も上や雀も雀も
雀の柳く雀も雀も雀も
戸照の一際雀も雀も雀も
大空も雀も雀も雀も雀も
性急か雀も雀も雀も雀も
雀の烟解るく雀も雀も雀も
雀も雀も雀も雀も雀も雀も

雀も雀
雀も雀
雀も雀
雀も雀
雀も雀
雀も雀
雀も雀
雀も雀
雀も雀
雀も雀

駒鳥

蜺

蜺

駒鳥の如く雀も雀も雀も
雀も雀も雀も雀も雀も
雀も雀も雀も雀も雀も
雀も雀も雀も雀も雀も
雀も雀も雀も雀も雀も
雀も雀も雀も雀も雀も
雀も雀も雀も雀も雀も
雀も雀も雀も雀も雀も
雀も雀も雀も雀も雀も
雀も雀も雀も雀も雀も

雀も雀
雀も雀
雀も雀
雀も雀
雀も雀
雀も雀
雀も雀
雀も雀
雀も雀
雀も雀

春

鈴

海苔

松風子ひあく物う小えきり
松や生雲るあき歎
新風やより松よ人の夢
海苔飯や傍上雲をき一の宮
海苔多の松よあき屋新飯
新のたてはくは松のきひけ
月代や傍あきと海苔のよる
友布や札の上の海苔一祀
新の焼く月子跡る女菴の家
ふきの新海苔飯あきり雲を電

雨芽
芭角
梅空
可英
遅休
舟登
万里
墨山
梅亭

海貝

漸意

二月

新の海や海の新のさるの夕月秋
人の上よりあきりる妻女漸意の鐘
漸意のりまうけを娘の程をた
津雪も地は落風ん々意の鐘
海はなや縁志をるはは意信

節之
初雄
一蓮
海女
一甫

美入や小松乳松風袖まつく

江戸 氷狐

右よりこ人上定よりかの中

武藏 吐香

休まわとあきりるよああ

陸奥 梅侯

類題十萬句集初編春也部上終

類題十萬句集初編春之部中
 洞海舍涼谷編
 一具菴一具校合
 確嶺
 茅九
 片下
 涼谷
 右秋
 涯美
 荷堂
 梅海

類題十萬句集初編春之部中

洞海舍涼谷編

一具菴一具校合

二月

穠芳と遊人 二月式

文更長

たより雨降 雨持まも 二月式

回のみよ空のゆき 二月式

糸文の庫裡 這へ 二月式

山鳥の連を 結つ 二月式

かおのかきと 香る 二月式

山よりもみ 秋よ 二月式

登雲の鳥 紅き 二月式

夜更着

二月

陽雲や種子出るまきも二月
 月の毛ハ赤子日紅さん二月
 二月も列々いふも赤うね
 赤んもの紅しと安ま二月
 手試も赤んものま二月
 乾種のと魚投出ん二月
 ぬ月や赤んものま二月
 ねと空や掃除の赤く二月
 物ま〜ぬ月の月ま〜二月
 ぬ月や角力の異〜二月

武藏

雑因
 文里
 芝葉
 秋葉
 若月
 伍好
 字魯
 文廣
 涼谷
 風心

二日

初午

ぬ月〜二月の初〜
 ねと空や方赤運〜二月
 赤んものま〜二月
 ぬ月や西〜二月
 楠の根の赤〜二月
 赤んものま〜二月
 初生〜二月
 初午や赤〜二月

下毛

涼谷
 星谷
 鼎湖
 笑語
 市席
 田葉
 涼谷
 栢樹
 一甫

休干

二日金

文更

旅僧や宿元初午を過ぎ
初午よ持てお祀せしむる
まの午や持て人の愛を
初午や物の小糸を
まの午や衣の衣を
初午や衣の衣を
初午や衣の衣を
初午や衣の衣を
初午や衣の衣を
初午や衣の衣を

月 峴
乃 登
大 梅
素 櫟
松 秀
万 里
了 是
道 雄
梅 字
云 々

〇六十

春月

初午よお祀の宿元初午を過ぎ
梅の本よ持てお祀せしむる
山もよ持てお祀せしむる
まの午や衣の衣を
初午や衣の衣を
初午や衣の衣を
初午や衣の衣を
初午や衣の衣を
初午や衣の衣を
初午や衣の衣を

二 丘
新 水
夕 山
山 笑
素 櫟
素 櫟
月 下
芭 蕉
桂 葉
若 帆
若 帆

春

春氏

人あまを志とあそびくし其の
 真の月一日うを多あの上
 出さきん子諒のうもや其の月
 船若い 伝入り 兼ぬ其の月
 ちまのうと釣瓶ははを上りを
 一向子嘘とんえや其の月
 何とあくあも志むや其の月
 群くくを初ぬ其の月
 山くくをあのをや其の月
 そふ事子難あくや其の月
 物くくをあのをや其の月

素志 換海 友之 今 涼海 西令 文廣 雨花女 一甫 梅序 秋巻

春

春の月 大さきあをよ其の月
 本村の空 志をく其の月
 細網のかく其の月
 糸のまをい 其の月
 築橋も橋く 核はや其の月
 弱人の月 其の月
 雪消と町くはく其の月
 其のうと軒の橋く其の月
 山くくをあのをや其の月

新々 田第 昨日 糸付 里南女 休圃 月岨 涼谷 一樓 妙字 右橋

了花お柄をよや春の月
小松花をよきあしは春の月
あけあけをよきあしは春の月
春の月をよきあしは春の月
山と海の間をよきあしは春の月
あけあけをよきあしは春の月
春の月をよきあしは春の月
壬生おをよきあしは春の月
笠船をよきあしは春の月
福をよきあしは春の月

松村
五風
千翁
真肥
麻衣
川長
高女
岸洲
五光

春日

春の月をよきあしは春の月
御のあきせはしは春の月
聖さより葉は来より春の月
春の月をよきあしは春の月
照せよと梅の宿をよきあしは春の月
旅籠屋へよね旅をよきあしは春の月
春の月をよきあしは春の月
春の月をよきあしは春の月
春の月をよきあしは春の月
春の月をよきあしは春の月
山里よよ新新もよきあしは春の月

武藏

古武
篠山
篠流
怒雲
祖平
高女
雁壺
季朗
旭
羽衣
尾臺

春

朧月

船の暮も中つるも如き月の
 貝壳を映へたる如く月の
 葎うらうらとせし月の
 山の端をさへる如く月の
 あり余の繩の如く月の
 あり余の物や如く月の
 あり余の竹も如く月の
 あり余の糸も如く月の
 あり余の舟も如く月の
 あり余の月も如く月の

陸奥

杜賞
 柁機
 田真
 古翠
 風石
 慈水
 浦山
 文島
 常陸
 浦山

朧夜

春

暁の光も如く月の
 暁の光も如く月の
 暁の光も如く月の
 暁の光も如く月の
 暁の光も如く月の
 暁の光も如く月の
 暁の光も如く月の
 暁の光も如く月の
 暁の光も如く月の
 暁の光も如く月の

官伎

東二
 雀堂
 道雄
 一甫
 正令
 常盤
 田兼
 香付
 民枝
 愚本

春夜

三月月の西を照のちあは
燈のまきく利ね機く
掛粉や並んこ山北あつて
春の初や博の初さ為みく
まの初やけの家のおひく
春の初や心あつて庭掛
春の初や難は飛掛と船は
まの初やと津まく村はゆる
春の初や雲の初舟帰る声
春の初や機のおひ帆の光

李席
お機
おる
才
鼎湖
久藏
貞雄
昭眉
一甫
深月

常陸
下総

春宵
初雷

初雷

初雷や急をく降る雷あま
多し初雷は鳴る
鳴止る初雷は鳴る
古鐘やを伴雷の音を
初雷や初雷や風鳥の中
角屋をく初雷とを電

子裕
江戸
てい女
菅郷
有月
共賞
乃葉
荷了

出代

出代や限あるを延ち
出代や梅屋はを延ち
出代や其ひ満る哥の房
出代や兄弟あつて伴来

下総
多子女
其地
祖所

春

涅槃

四月ちと人の世を暮る涅槃
俗とてハ俗もも近し移る人像
涅槃今や年々云々峰の雪
所々此道ももあつる涅槃像
涅槃今や火燃しけいおの墓
月とるの形しるるる移る人像
涅槃今や足弱連て續歩の
隣片草子風の上る移る人
移る人像 暮る香の壺うれ
檜中の葉葉花は移る人

一 具
今 難 嶺
魁 巢
出羽 椿 海
う移る
多よ女
石 苜
斗 筵
咫 雲

〇六六

西行忌

水口祭

田歩
畑歩

西行忌の暮るよる切畑
人の世の暮るよる移る人像
年々ハ移る来や涅槃像
其中よる移るよる白や移る人像
乃連て解移る若や西行忌
白の毛の筆物や西行忌
又白もあつるおろく山の雪
一移るおろく片移る田歩これ
命物や片移るの親老畑歩
畑歩移る片移るの暮るる

一 苜
南 石
石 上
寄 付
石 上
小 圃
旭 丘
雁 登
妹 登
二 丘

春

春日 初虹

細舟や 舟橋を渡り 跡る舟
島舟よ 何れをさるや 下り舟
舟より せりたる 舟を 細く舟
細舟や 舟橋を渡り 跡る舟
富舟 連舟 舟を 渡り 舟
了る 舟よ 細舟 舟を 渡り 舟
若戸 細舟 舟を 渡り 舟
舟の 舟を 渡り 舟を 渡り 舟
初 舟 舟を 渡り 舟を 渡り 舟
通し 舟の 舟を 渡り 舟を 渡り 舟

陸奥 南山
菅依 一 舟
南船 一 舟
陸奥 一 舟
不曲 一 舟
柏舟 一 舟
有舟 一 舟
尺山 一 舟

春山 春水

春の 舟を 渡り 舟を 渡り 舟
舟の 舟を 渡り 舟を 渡り 舟

陸奥 全
舟人
舟人
舟人
舟人
舟人
舟人
舟人
舟人
舟人
舟人

春

春海
春川
春山

けあいのこゝろの春の氷
春のまゝ雨のちかをみる
さる水動くを解の後さ
休くとあくる時を春のま
小系女うそ鞋はくや春の水
春のまゝあまもよる時を
菜畑の乃あ〜と春の海
爰とふふ時あ〜と春の海
春の川 柳の花先まゝ
〜とあまもよる時を

一具
一南
素標
羽人
篠山
阿兮
一笠
キ山
風石
宇鳥

春空
春雲
初花

春の空
春の雲
初花
春の空
春の雲
初花
春の空
春の雲
初花
春の空
春の雲
初花

一
風毛
一
春
女
大
二
先
梅
五
大

春

初櫻

本城に... 初也や... 月... 初櫻... 肩の... 系... 葉... 堀...

抱保 忍電 英山 浮島 雲象 月岨 多よ女 青池 五臺 一毛

阿波生

春櫻

糸櫻 接木

接穂

先... 接穂... 白... 能... 成... 先...

多よ女 丸末 英山 麻交 鼎湖 杜年 聖栄 照栄 五風 民枝 大費

春

挿木
苗代

凡の木の種を挿す
 種木の木の種を挿す
 試の木の種を挿す
 苗代や種もあふる
 苗代子孫の古代の木葉を
 ありては種とあふる
 苗代や其の種とあふる
 ありては種とあふる
 苗代や其の種とあふる
 苗代の木を挿す

羽人 羅周 耕田女 芝菜 玄く 今 竹 岫 桂葉女 涼谷

種卸
菜花

菜の花の種を挿す
 菜の花の種を挿す
 菜の花の種を挿す
 菜の花の種を挿す
 菜の花の種を挿す
 菜の花の種を挿す
 菜の花の種を挿す
 菜の花の種を挿す
 菜の花の種を挿す
 菜の花の種を挿す

麻立 芳菴 雨明 不曲 松秀 羽人 川長 ちうき 了是 菜古 菜棟

菜のおおのちのちのちのちのち

菜の花や 菜の花のちのちのち

菜のちのちのちのちのちのち

菜のちのちのちのちのちのち

菜のちのちのちのちのちのち

菜のちのちのちのちのちのち

菜のちのちのちのちのちのち

菜のちのちのちのちのちのち

菜のちのちのちのちのちのち

菜のちのちのちのちのちのち

多よ女

竹葉

麻交

杏園

栢楸

斗米

稻海

作妹

屯琴

道雄

菜のちのちのちのちのちのち

雨花

菅破

双之

赤莖

屯来

双二

竹了

斗圓

四明

春浦

大根花
虎杖
早蕨

魂註の神を喰や茶古根
藜より席杖を中一節の委
子蕨や松何れもく福くゆく
比や人の山苞維く掛ひゆく
早蕨や根の内すくみの紙
まわらひや杖茶振の山七春
宿る宿るを子蕨掛く此の久
初蕨の宿る内葉く一把握
一概子伸く寝くわくわく
山より宿るをわくわく

一 膳
乃 草
素 考
雨 暈
易 足
百 五
素 志
荷 之
雁 臺
床 水

菅坡

陸奥

蒲英公
麻蔴

種芋

杉菜

菊根分

此種もの根子松を蕨英公
蕨より宿るを又蕨之麻の種
麻よりや孫の申く又新也
種芋や長くを雀の粒もる
と一葉の届くね世後や芋の種
肉意くすくは荒也杉菜が
並出もる多の分よ杉菜が
作すを何よ是等一杉菜花
多て各葉を委くす下宿る
葉の宿るも是くす生え枯支友

此 葉
凍 草
先 来
確 嶺
旭 丘
確 嶺
月 岨
亦 席
多 葉
多 女

春

菊苗

菊苗の葉はよく青まはる仙のり

碓嶺

芦角

秋柿の二股形ありや若の角

八采

芦芽

若そくや氷のさくは芽も雪

丁亥

葛芽

若の芽は秋の心のさめく

光未

柗萌

秋先の出来より和や芽萌る

椿海

紫縷

松越るる夜も雪も静か芽も冬

謝堂

春草

松の竹枝は若を冬より冬より

考笠

菘菹

菘の物字は母を冬より冬より

庚年

菘菹

菘の物字は母を冬より冬より

古川

畠焼

焼ぬ雪や山を焼くは花畑

春

山焼

山焼の形は流や水は河

あよ女

焼く山のさめはや芽種よく

椿海

火焼の山平にや後の船

道雄

天気の桐葉より山を冬く

雨考

月影は小春の夜も焼ぬ火

蜀綿

冬も雪をそくは焼ぬ火

若舟

焼の系は冬も焼ぬ火

玄く

山雪は冬も焼ぬ火

巢乎

片き雪の松葉は芽も冬く

惟州

若の葉は冬も焼ぬ火

新巢

焼野

春野

燕

春

山
新
乙

お新の珠数をさすは藝入
乙子や新子くふる粟田口
もる月と刻くよる舞は藝入
去手の新子一寸長く云を式
乃少も田舎子菜ね燕とふ
去手の兄子合焼燗の茶を
夕漬や志願先まて藝入
粟玄を子人立替る且う柳
燕や華の片くえる切通し
某種屋の店娘くは藝入れ

谷 一 具 後
原 谷
右 橋
大 菅
ハ 菜
布 席
多 女
了 是

華子

けし兼上りもろくもあはれ
ゆり兼心もさけし乙子とふ
五六の宮よ来ては舞は藝入柳
今来るともあはれ多文云を我
呼ぶくは舞の来り初 燕
物子と羽も儒色の乙子我
燕のけし来なくは歌り初 燕
粟をさすく四の道入 燕入 於
云をや子并始も此より
息あき来ると白くは藝入
夕燕谷の庭くも廣くは

陶 畑
積 翠
けし子
去く
呼友
道 雄
一 南
名 村
可 乃
素 志

雉子

梁ノイハ海ノ福ノクニ鳴エテ
 善徳中隣を憐ル云々也
 百餘年ノ株下ニあるもわらわ
 菖子ノ葉下ニ有る物成るれ
 云々やいつも機へる浦の河
 谷ニ有る新や小山を成るは
 岬ノ子走るうんまうまうの声
 鳴おは雉子の去るお荒うの
 聲ノ荒早の聲おくとわりの色
 いろ葉下にもあるは雉子の声
 大木の上の雉子の鳴る声

子格
 云々女
 古翠
 竹里
 蓬亨
 抱儀
 蓬俗
 嵐齊
 有月
 丹峴

山の木ノありあり雉子の鳴る声
 大木の上の雉子の鳴る声
 並松ノ葉のありやわらわの声
 雲の下の雉子の鳴る声
 三尺の中津の林やまうの赤
 心ノあまねく生る雉子の声
 雉子鳴や操もはなぬ人の来
 惣つのも穂も雉子うれ
 伐りの穂もわらわやまうの色
 一畑歩りて成るやるの雉子
 甲斐の雉子は来ぬ夕雉子

大木
 三平
 了是
 大費
 孫哉
 不曲
 確嶺
 一具
 野泉
 抱儀
 南枝

か子新の鳴るるあし雨の雉子

市石

きく鳴や秋よ志ま山以ん危

昭眉

変くく中曲室の依や雉子の声

稲海

地くさく今更山のまきく成

常陸 南山

山ちや厠の下にまきく一の表

宇野

明切と後をも鳴く雉子の色

道雅

你先をもくくをあおき雉子色

全

あゝの鳥くお持るく心は雉子の声

南部 尚古

雉子鳴や戸隠く山く伝く

茶中

まねくくの音く曳はくれきくの声

一 格

秋の雉子鳴るく出ぬもあゝの

全

秋まきくユタ初め解を免りわ

香蒲

雉子鳴や今秋くくく竹の音

秋堂

まきく初めよと近出ん竹をく

田舎

吹くく竹山のまきくまきくの声

揚花

種く山は竹を鳴くやまゝ雉子

醫閑

雉子鳴や岩根のたの竹をく

可得

月茂く近出ん雉子のあゝの

其序

雪の雉子鳴や木まぬをく

ちく

今鳴るまきくと遠くまきく雉子

難用 四 明

歸雁

鶯子啼や世を以ての古戦場
江戸 伯丈
 只くまゝ立鶯子声もささるる
 伸女
 きりや馬先のさる人掛
 蚕浦
 雁の空も淋しく来や鳴る雁
 荻谷
 秋の空も淋しく来や鳴る雁
 丸平
 海山より来たりや鳴る雁
 木公
 鳴る雁もくさるる雁
 一陽
 云は後より来たりや鳴る雁
 巨童
 未木

行雁

雁別

春雁

月影のあかき雁の暈
羽人 然巢
 行雁の物より来たりや鳴る雁
 東橋
 とくく雁の来たりや鳴る雁
 玄々
 行雁をおもひ入ぬ雁の来
 素志
 雁の来たりや鳴る雁
 千々
 来たりや鳴る雁の来たりや
 雁嶺
 其の雁の来たりや鳴る雁
 三枕
 来たりや鳴る雁の来たりや
 休圃
 来たりや鳴る雁の来たりや
 乃蓋

春

春鳥

親雀

雀子

春の雁並鳥を憐しくさく成
 芥々あそ月一旅舞於春の岸
 所阿々石切多や 春の鳥
 木母ち能るよ強うや 春の鳥
 空の春よ後向ううさる能鳥
 群 宿まうを動かや 春の鳥
 嬉し何忘るる子も存雀の鳥
 葉も夜く子も存する雀の鳥
 雀子の一旅おくる 階子うれ
 すく免もや 芝をくらけしたる鳥
 やしとてかたむかぬ雀の子

多よ女
 鼎湖
 若陸
 杉白
 古川
 文海
 積翠
 芳蔭
 西樞
 何年
 ちよ女

春

夕紅尚く飽舞柳や 雀の子
 雁相曹の気の毒うや 雀の子
 少々の鳥ももれとるよ 雀の子
 羨うけや 雀子あくる 雀の中
 枝編うくく 秋時 雀うき
 断く 鶴籠惜うや 雀の子
 吹風の鳥子よ 枯くせ 雀の子
 子よ 春あそく 舞を 捨るも 雀の子
 舞をよけのまを 仕舞ぬ 雀の子
 曹野も 一年あまや 雀の子

多よ女
 民枝
 久藏
 五峴
 今
 梅宇
 秋堂
 宇柱
 雨お
 蓮子

采雀

曳雀

曳鴨

鳥巢

鳥文

初蛙

蛙

梅の葉を修し採雀の好

雀の葉や卵の向ふを修す

行や鴨の葉を修す

山つゝ葉を修す

鳥の葉や枯葉を修す

鳥の葉を修す

鳥の葉を修す

鳥の葉を修す

鳥の葉を修す

鳥の葉を修す

二丘

民校

丁市

氷谷

素志

赤水

布席

雲梯

芳薙

乙女

廣平

道権

素貞

多女

比基

権杖

一之

赤月

友之

无琴

春

柳を回す十粒の例は所性
 以て愛も浮華を去る性也
 東の星は初は性也
 夕性ありて田家の家名は高
 貴なる梅も来りて花の性
 別を捨て其性より一塵の香
 存す夫々皆性也向性なり
 葉は皆山より来りて花も
 舟中より止性なり
 鳴きも皆向性なり

芭蕉 一先 梅亭 春浦 柳琴 一先 梅因 芳笠 葛之 田華

鳴きも皆向性なり
 日向より初は性也
 体光回す初は性也
 病所からの性也
 下男
 林は空をゆく性也
 艾揺る古き性也
 此毛の羽子も飛片く性也
 華はゆく性也
 鳴るも性也
 一里の性也
 大根の性也
 飛も皆向性なり

柳機 芳郷 伸女 今 雨村 風毛 一之 芳谷 有枝 深谷 聖榮

田一粒小庵子布しや鳴性
あゝ性あゝ向ゝる葉を飛
字そや性よけくゝる飛
鳴あゝや啼ゝ性花の上
井の河ゝゝゝ子困ゝ性鳴
鳴あゝや於中子葉やあゝ性
鳴あゝや鳴ゝ向ゝる性ゝ於
月あゝ性鳴あゝの性ゝ
鳴あゝの性ゝ鳴あゝの性
鳴あゝの性ゝ鳴あゝの性

天山
月峴
子富
三槐
一雅
白起
香州
奔海
多よ女
斗延

蜂

蜂巢

春

鳴あゝの性ゝ鳴あゝの性
鳴あゝの性ゝ鳴あゝの性
鳴あゝの性ゝ鳴あゝの性
鳴あゝの性ゝ鳴あゝの性
鳴あゝの性ゝ鳴あゝの性
鳴あゝの性ゝ鳴あゝの性
鳴あゝの性ゝ鳴あゝの性
鳴あゝの性ゝ鳴あゝの性
鳴あゝの性ゝ鳴あゝの性
鳴あゝの性ゝ鳴あゝの性

養育
不曲
る芽
石符
谷後
文来
杜年
一甫
浮月
雁登

式型子夕々危く也於縹糸
 縹糸よりや死を益しく洗ひ獨
 拘りしるや縹の證は小紫垣
 大船の以つ出るよりよ縹の舞
 少くを禁む所の縹證く々縹
 初縹や而のこころの縹串
 縹のこころ縹の舞く承承串
 枯草のよも縹をば縹の花
 縹のよも縹をば縹の縹
 縹のよもや花の上より縹を縹
 縹のよもや花の上より縹を縹

大費

葛松

蔓血

棟く

須光

石符

穿石

田齋

量山

干文

縹くや縹を縹する縹の縹
 縹のよもや縹を縹する縹の縹
 縹のよもや縹を縹する縹の縹

縹糸

木司

芦舟

玄子

雀堂

斗玉

玄く

田齋

全

田螺

蝶成るをや 而特重なり
てし遠ふや 雛の小橋を塗布す
追ふや人子持きく 飛小橋
中あつても 却るまを重なるの蝶
跡を付る一皮を重なる跡
跡を舞の鳥り 於てく
橋くや 幸山さく 海くく
跡のてう 於来は布く 土着う 於
跡をさる ありきや 月子田螺
松山子 於さく ありく 田螺

双之
七
キ山
寄御
斗圃
示示
梅字
古翠
是権
昭本
宗井

鹿落角

形より 鹿落の如き 田り
落月や 田螺の如き 春なる鳥
足元より なる 鹿落角
妻喰ふ 出く 鹿落角
跡のてう ありきや 鹿落角
白鹿のり 鹿落く 鹿落角
田一牧 鹿落く 鹿落角

有一
振馬
多よ女
大費
去機
量山
椿海

鮎鱈

為るも 鹿落の如き 田り
ちるや 鹿落く 鹿落角
字のまより 鹿落く 鹿落角

若彼
素封
全
全

春

日之乳春体... 櫻の巻
 月之過 梅子之巻 蚕 枕
 夕月子格... 湯色小巻...
 喜るや 壺坂 ち乳字の巻
 志つ... 花を指乳ぬ柳...
 雨... 花入... の...

類題十萬句集初編春之部中終

洞海舎涼谷編
一具菴一具校合

三月 弥生

三月やあ...
 初... 甲... 弥生...
 何... 弥生...
 細網... 弥生...
 唯... 弥生...
 亀角... 弥生...
 雛... 弥生...
 這... 弥生...

大梅 應雨 文洲 一山 一南 雞田 荊水 汀元

雛

春

雛を南无尺をすれ膏の切刺
 夕山
 夕子崎地も九重やふふふ
 若帆
 昔もふふはふもやねふふふ
 古ふふ女
 入おふ雛の初焼炭をくら
 文和
 燈籠のふふふ配るや雛の白
 玄く
 おふふ雛のふふふは山ふふ
 今
 四ふふも四ふふふふふふ
 若及
 雛の白ふふふふふふふ
 交船
 若舟のねて底るふふふ
 合昭眉
 雛市や買らぬ杖は小人形
 芭角
 ふふふふふふふふふふふ
 石上

夕山
 若帆
 古ふふ女
 文和
 玄く
 今
 若及
 交船
 合昭眉
 芭角
 石上

手早か使くの手跡又雛の雛
 一具
 雛の中ふふふのや古はふ
 今
 並ふふふふふふふふふ
 和琴
 法衣ふふふふふふふ
 一雅
 物とふふふふのふふふ雛ふ
 乃蓋
 雛を買ふ月ふふのふふふ
 麻交
 布の雛を月ふふのふふふ
 布席
 法衣とふふふふふのふふふ
 高よ女
 手寄ふふふの料理や雛祭
 今
 旗もふふ雛もふふふ
 天年
 ふふふふふふふふ雛の夕ふ
 久減

一具
 今
 和琴
 一雅
 乃蓋
 麻交
 布席
 高よ女
 今
 天年
 久減

雜合

買ふまゝの籠を並つる扇うね
才の子れ糸糸信よ世不籠うね
子のそ糸糸受つるうね籠の様
籠のりや浦屋呂屋もねめく
狹道へはさし出さるもく古籠
お赤桐やお倉あさくぬり片
三月月をささくも籠子一人状
借るもや子屋るや籠の白
多急よりうらも籠の産産我
勢自し一羽頂くや勢の
勢のまらうらうらうらうら

桂 程
大 貴
川 長
羽 人
宇 弘
惟 子
篠 侍
二 晶
確 嶺
田 葉
三 桃

沙予

旅人のささくもあさく
沙予もや先走せり刀もあ
佐吉の勢籠をまは沙予
沙予もあさくもあさく
手付りも者籠をまは沙予
神風もあさくもあさく
八丈もあさくもあさく
伊予もあさくもあさく
夕暮もあさくもあさく
二所もあさくもあさく
産まねく沙予屋の籠もあ

芳 谷
去 久
田 葉
乙 女
常 御
素 志
茶 鞠
清 風
有 月
乃 黄
麻 交

春霜

一書二譜の書もおぼたて
翠舟の舟も色香はてた
深川を池もゆ侍志存承
あはまの草も残るはてた
人影の杉も色を以てた
大を真 杉も色を以てた
あはまの草も残るはてた
松も色を以てた
茶も色を以てた
室のの意も残るはてた
菜園の草も残るはてた

水谷 素樸 斗筵 大貫 松秀 永号 文鬼 美文 嘉月 戴星 斗

別霜

桃

千柿の味もあつた
管舟の舟も色香はてた
柳の葉も色を以てた
おのづから色を以てた
被るも色を以てた
そは神建も色を以てた
出たも色を以てた
さるも色を以てた
刀も色を以てた
柳も色を以てた
梅も色を以てた

九陸 文富 薪水 素白 素有 宇野 是雄 正令 吟霞 梅宇 玄

春

桃

万葉を鼻ももつけん桃の至
 妙子翁を寄ふ子もやう桃の也
 少くは桃の多う赤子の林一う介
 新を拵うよもえと枝よう桃の也
 活と桃の此産者下詠う
 山重や桃の子出る春桃のり
 惚ろあして月足付を毛の也
 もの菘菴の焼く午お運道
 かへはし娘女の節や桃のり
 油煮る鼻や償辺の桃の也
 上京のりもももももももも

云く
 二洞
 管郷
 今
 雨村
 享校
 玄く
 唐屋
 谷後
 尺山
 首堂

櫻

春

松のりもよねうるや桃の也
 登根型此焼産るや桃の也
 舟借よ新や及香ま桃の中
 桃さくやえくまうと合料理葉
 赤子は家も何う産桃の也
 赤室のあるを住連は桃の也
 本納産のきや何や新はく
 一俵あくもんる桃一う
 空もももも桃をまうくははる
 瓶くはは角やも申まき
 ようはくもももももももももも

其種
 よき
 幸雄
 万里
 旭丘
 椿海
 丁吉
 史子
 小圃
 堅菜
 桃儀

よの形や木を由ひてもちろ梅
牛のそのあふの梅の木の芳大
庭とちる初午はくう咲よち里
菘とちる名も木を殖る梅う於
此里と木を宿ひのさくさ
後志きくくはる本も梅大
叔梅や木手布けは菘初る
梅ちる名くくめや種の色
小原女此る名くく梅う於
柴竹の宿まう上此まうく
梅くく名も梅く梅く

雲象
三槐
八采
核海
久臧
斗筵
貞雄
旭立
今
羽人

花をさか遊の名をさくはく
ちる梅やう庭鼻ま庭う於
片くくと梅ま名付む出博式
風の初の跪く風信や於梅
菘まう咲ままま二交り梅大
咲くくぬくも中くまはくさ
羅漢ちの梅結ある臺う於
體の志くも梅うう於はく
庭梅の昔くく名此梅う於
三月月や梅初るう於はく
梅はく名はくう人う庭ま名

松井
篠山
今
子之
菜徑
有月
初色丸
少鳥
不曲
里陽女

明星の友人と新馬一橋うね
葉やと袖のほのめ海一衣
はく程日の入易き物を傍
心取女の鳥すくはる橋うね
川被よと手をかきそゆく橋うね
大奏子橋を盗む月影うね
雲中此を遠通る橋うね
日影をわらわくく浮きまはる橋
きくく喉を根の末は是うね
子傳命一人を不戸く出る橋
湯釜を橋の舟よと傳うね

東川
尾臺
元分
旭
南山
二休
雲翠
雞田
南枝
西阜
キ山

陸奥

山崎もちきくくく橋うね
兄を舟りの中も橋うね
秋の夕暮を橋の上
つと足切の片をねはくうね
葉草の妙しうね橋うね
山の雲を橋を通れを
入水の橋をかくん橋うね
折く手をあまうね橋うね
結くあま其上はくうね
小峰の縁の橋を化れを
三月の橋を伝うね

雨村
林了
抱琴
四明
大貴
風石
一之
今
薪水
雨夕
春月

陸奥

春

春申のやまを昇るに梯あり
梯名よりや月影の二人遊
初を初遊後幾年の片々式
携紙より一曲中をさへし
片板屋の志つゝ我輩も梯あり
南せしと梯を先令撫夫は
形より片の片り立梯の梯あり
その過りて見せしと吾も梯あり
川面より空の梯ありとけり
鐘律は其水に石花梯あり
るをををををををををを

文里
一竹
今
今
今
今
今
今
今
今
今
今

山櫻

春申のやまを昇るに梯あり
梯名よりや月影の二人遊
初を初遊後幾年の片々式
携紙より一曲中をさへし
片板屋の志つゝ我輩も梯あり
南せしと梯を先令撫夫は
形より片の片り立梯の梯あり
その過りて見せしと吾も梯あり
川面より空の梯ありとけり
鐘律は其水に石花梯あり
るをををををををををを

回華
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一

春

遅櫻

大腕や教もも雲の山は
山橋水や不~~...~~花子
花~~...~~兼く梅の内より山橋
けしきも~~...~~花をさへ山橋
深きと雲の里に色さへ
床しきのみ傍りて生 橋
狼も~~...~~花をさへ人あけ 橋
花をさへあふ~~...~~花をさへ橋
花をさへあふ~~...~~花をさへ橋
持~~...~~花をさへ花をさへ橋
花をさへ花をさへ花をさへ橋

一 具
松 栗
石 苜
千 之
素 心
木 然
田 葉
家 付
幼 難
竹 里
一 根

花

花をさへ花をさへ花をさへ橋
花をさへ花をさへ花をさへ橋
花をさへ花をさへ花をさへ橋
花をさへ花をさへ花をさへ橋
花をさへ花をさへ花をさへ橋
花をさへ花をさへ花をさへ橋
花をさへ花をさへ花をさへ橋
花をさへ花をさへ花をさへ橋
花をさへ花をさへ花をさへ橋
花をさへ花をさへ花をさへ橋

不 流
碓 嶺
椿 海
可 得
松 舍
蚕 浦
今
文 鴈
文 光
笑 壺
羽 白

昔

乃るはまな人まを何と云ふ
若くはやいふ所のまを何と云ふ
明智苑にまをいふやまの枝
常しくまをいふまをいふ
若くはまをいふまをいふ
柳の枝のまをいふまをいふ
若くはまをいふまをいふ
若くはまをいふまをいふ
若くはまをいふまをいふ
若くはまをいふまをいふ

左米
文海
林圃
管郷
伸女
山雄
雨考
山雄
木
祖

若くはまをいふまをいふ
若くはまをいふまをいふ
若くはまをいふまをいふ
若くはまをいふまをいふ
若くはまをいふまをいふ
若くはまをいふまをいふ
若くはまをいふまをいふ
若くはまをいふまをいふ
若くはまをいふまをいふ
若くはまをいふまをいふ

四葉
徐白
雞周
大貴
去子
伯史
原谷
若石
一具
一樓
栢樹

おまゝにまゝに梅の峰の
まきと角をくちまき花の
まきとや山下の向うの
梅の峰の州のまきと
修徳のやまの中は
まきとやまのまきと
親持のくちまきと
まきと花のまきと
まきと花のまきと
まきと花のまきと

十翁
文家
松竹
月峴
今
右拳
今
文骨
一甫
斗米
乃甚

まきと花のまきと
まきと花のまきと
まきと花のまきと
まきと花のまきと
まきと花のまきと
まきと花のまきと
まきと花のまきと
まきと花のまきと
まきと花のまきと
まきと花のまきと

麻交
今
栗笑
多上女
鼎湖
今
久藏
雨権
字師
孤米
素樸

ちりやちりやちりやちりやちりやちりや
九人ともちりやちりやちりやちりや
あの中へ憶病種の籠せり
先時ちりやちりやちりやちりや
月あききく物のかさの戸口
花雪のあつらふ花雪
雪のあつらふ花雪のあつらふ
雪のあつらふ花雪のあつらふ

具谷
右拳
鬼郷
右鉄
左古
今
旭丘
二晶
雲聚
今

あつらふ花雪のあつらふ
一本二本算し一果あの中
独りのかたきちりやちりや
花のあつらふ花雪のあつらふ
ちりやちりやちりやちりや
雪のあつらふ花雪のあつらふ
雪のあつらふ花雪のあつらふ
雪のあつらふ花雪のあつらふ
雪のあつらふ花雪のあつらふ

惟学
高の
今
確然
茅九
壺羊
易足
羊山
松井
今
一之

花雲

花雨

菱あを帯くや下宿の白
あゝ赤男の月夜
蒼催まゝや白鳥の山のち
待々ぬれぬあまの福の
空をまぐらむやあまの月夜
花の中地のけも一生
境内よあまの福の
折先もく果あまの
るも来をくあまの
花の空をまぐらむやあまの
て花やまの福の

五 岨
為 益
警 閑
廣 平
田 華
五 岨
椿 海
赤 丹
益 木
五 竹
斗 米

花見

出雲
木敷

華傍くかゝる常世の
雪とあまの月夜
花の白田舎まゝとあまの
縁の海や草鞋まゝとあまの
椿とあまの月夜
草履まゝとあまの
倍長の近ふとあまの
右村よ清もまゝとあまの
一壺の秋酒もまゝとあまの
下宿地よ花見もまゝとあまの
あまの月夜

陸奥

雨 岨
田 高
蜀 粥
素 考
一 之
夕 山
文 俳
素 有
松 怒
田 華
玄 々

舟下何るそきも海に
 木の香燻るりよ噴る
 川越も七の内の枝に
 和よ糸の傳形と花見
 乙の子の枝柳お呂氏
 振るの雲ももてる花
 曲り中身の傳形お呂氏
 只袋押く枝わを花見
 月のあはるる席ころ木
 海棠のるや繪のるの
 海棠や枝り雨の垂り

窟室
 三槐
 雁登
 季子
 高よ女
 貝谷
 忍雪
 一雨
 桃塙
 布席
 ちり色

木具

木蓮花
海棠

梨花

枝物の橋木もやうを
 月露のれを何れを
 橋登り維の一房の
 片しと底よまを
 梨のをもあをりや
 若くし霞の来り
 赤もを於赤の色の
 山梨や 暮もを
 茶屋の葉の影
 一甲子藤と
 焼くる煙の

嘉月
 周徳
 五峴
 一具
 橋登
 雁登
 龜得
 高よ
 氏枝
 桃塙
 一具

杏
木丸

春

董

鳥くけく揚る昔や木山の柳
木山崎やおのそよの流禱神
控籠の是れお鳥く市斤の節
伸る色や紫雲のく一花はる色
房るるもあふるも子も董は
西のそねおのくも董は
貝粒れくあふる董は
董董の房く一揚る
房く一揚る董は
董の房く一揚る董は
董の房く一揚る董は

籠先
一節
不曲
文三
抱孫
今
ちる女
乃董
大梅
京所
貝岩

春

了はあふの世傳やく董うれ
ち董特上そのもあふれし
針葉の古忠伝ふおの董
あくの巾は一陽をすし程
杉のくし耳のつくやおの董
董里や新し夕暮を色くす
そのくすはつたおははる光る
おのの紫雲をす董は
今梅くやうの妙地の董うす
董うすもあふる董は
あふるもあふる董は

出羽
あふ山
幸雄
掃く
松秀
有る
裁星
芭角
文傑
先
今

咲菫面をまきく〜菫の花
を待たず木茂りて菫
うんは〜はく〜菫
菫のふり菫をまきく〜菫
菫のふり菫をまきく〜菫
菫のふり菫をまきく〜菫
菫のふり菫をまきく〜菫
菫のふり菫をまきく〜菫
菫のふり菫をまきく〜菫
菫のふり菫をまきく〜菫

今 是 雄
蜀 錦
素 女
松 恩
之 直
素 女
萬 之
文 海
伸 女
而 考

連翹

辛夷

外海の枕籠る菫菫菫
れはあつきの傍をふす〜菫
菫菫のふり菫をまきく〜菫
連翹のふり菫をまきく〜菫
連翹や二子のありけのけ
菫菫や菫の〜菫
菫のふり菫をまきく〜菫
菫のふり菫をまきく〜菫
菫のふり菫をまきく〜菫
菫のふり菫をまきく〜菫
菫のふり菫をまきく〜菫
菫のふり菫をまきく〜菫
菫のふり菫をまきく〜菫

山 雄
大 費
水 氷
権 嶺
比 子
庚 年
宇 島
涼 海
大 梅
超 厚

春

茶摘

躑躅

敷

朝露の梨の辛者も
 梅もも侍世も
 子侍も侍も
 子侍川一
 梅も侍も
 山侍も
 子侍も
 子侍も
 子侍も

桃梅
 椿海
 之原
 川長
 雨
 一
 松
 芳
 正
 葛

藤

春

藤の陣
 三交
 此
 梅
 夕
 曙
 古
 藤

田
 其
 妙
 者
 暮
 今
 陶
 雅
 桃
 確

春夜半を空のより元々一宿の形
持たせしごとくは雲の影を
あらし候や建て跡より神楽堂
後片くや徳林一交籠後一
藤ちりや雨降上るひまを
山ふもや木々のみ葉を借る候
の落やあつむる候くわの付
俣一ゆき言説ゆき落見たり
無情のれきそりあふり
空梅も花通をたけくさのをも
若くやうらむる候一海一鴨

星谷
彌米
多由女
一夏
乃蓋
有月
丁お
四階
文俣
宇魯
涼海

山吹

春

あちのちもや梅もあまの上
標のしや梅のすや藤のむ
雨のあち美女物もあふり
竹も根まの小屋の集む花のむ
梅もまて生る候くわのむ
春山のあちあち候ね白のむ
二階まの客の何ごとくあちのむ
月のはん岸の花や花のむ
春夜のあちあち候くわのむ
山吹の糸もあち候くわのむ

道雄
梅宇
蒼丈
吏川
文鵬
子井
二丘
子格
竹
雅周
荷子

草麥

叫子鳥

鳥雲入

麥鶉

若帖

山邊女情をうけり
字書...
何れ海をうき来り
手寄...
鳥雲入や何れ雲をぬけ
世をぬき出れを敷く
茶の木...
外書...
四五寸の書...
若帖や...

九五
花甲
一蕙
多女
若月
永界
梅
田華
翠石
唐文

小集

蚕

竹妹
三月尽

若帖や...
福...
何れ来...
帖店...
一...
歌...
晴...
燈...
海山...
看...
加...

陶烟
亦水
大貴
去家
管
柳
蕙
竹
夕山
昭

春惜
行春

ちりちりして梨りの色あはる月夜
春の森のていつとて心
舟の舟のわくわくを真まを情を
はるまや松よるまよふ舟の東
や春の志せをもく谷のや
酒真く志く真のり延るれ
川真まを情くくを好く
豆代のとまねは半や真のり
申く春や々々海を好ひや
成るまを雨と兼く真のり
旅をたたく舟の真のり

子
小
藤
文
植芽女
今
涼
文和
玄
山
今
雄

行まをややうにふたのほも
木の陰のふたはまを春のり
木の影をれよりとまを春のり
折まをや二三もりく和切
や春まや角まを風のまを吹
近まをよ海とまを春のり
はるまやまを春のり
羞まをと春まを春のり
折まをよ春まを春のり
やまを春のり
折まを春のり

春
木
今
丁
五
抱
玄
四
新
之
昭

春暮

暖簾もあがりく　　舟
 舟のあはしあま里や　　春の暮
 不忍や　　舟のあはしあま里や　　春の暮
 舟のあはしあま里や　　春の暮
 舟のあはしあま里や　　春の暮
 舟のあはしあま里や　　春の暮
 舟のあはしあま里や　　春の暮

舟のあはしあま里や　　春の暮
 舟のあはしあま里や　　春の暮
 舟のあはしあま里や　　春の暮
 舟のあはしあま里や　　春の暮
 舟のあはしあま里や　　春の暮
 舟のあはしあま里や　　春の暮

春題不知

梅のあはしあま里や　　春の暮
 舟のあはしあま里や　　春の暮
 舟のあはしあま里や　　春の暮
 舟のあはしあま里や　　春の暮
 舟のあはしあま里や　　春の暮
 舟のあはしあま里や　　春の暮
 舟のあはしあま里や　　春の暮

舟のあはしあま里や　　春の暮
 舟のあはしあま里や　　春の暮
 舟のあはしあま里や　　春の暮
 舟のあはしあま里や　　春の暮
 舟のあはしあま里や　　春の暮
 舟のあはしあま里や　　春の暮

112

6291
3. 1A

